平成増補版

堀船郷土史

田久保周誉著

堀船郷土史を語る会編

堀船郷土史平成増補版　序　文

田久保周誉著「堀船郷土史」は敗戦後の経済的に困難な時代の事業でした。紙質、印刷や出版費など多くの困難を乗り越えて堀船に住む住民の協力により昭和二十七年に発刊されました。しかし、ここ十年来、この本の所在を尋ねられることが多くなり、平成二十四年九月に写真版により復刻版を発行しました。この復刻版を発行すると、我々を含めて、郷土の歴史に興味を持つ皆様から、郷土の歴史を再度、勉強したいという議論が生れてきました。また、郷土史を学ぶ講演会を開こうとの機運が起きてきました。このため、郷土史に興味をお持ちである当時の連合町会長である堀江毅を「堀船郷土史を語る会」会長として、北区飛鳥山博物館の学芸員の諸先生方のご協力を得て「堀船郷土史を語る会講演会」を開くことになりました。第一回の講演会は平成二十五年の春に行いました。会長には前述のとおり堀江毅、また、北井正也、大室洋昭、田村重光、田久保海誉が幹事となりました。この中で、「堀船郷土史」とその復刻版は初版の発行の時代、戦後という物のない時代を反映して、やや印刷が不十分であり読みにくいことや活字の小さいことから、印刷を新たに行い、さらに堀船の中の大工場や大会社などを追加する「堀船郷土史平成増補版」を出したいとの意向がまとまりました。各種の宴席の後や講演会とは別に、四回の幹事会を重ねて編集方針が議論されてきました。初版部分は岸律子様（新座市）により電子化され、これを印刷しました。

今回の増補部分では、北区飛鳥山図書館の学芸員の石倉孝祐先生、田中洋子先生には本務がお忙しい

にもかかわらず、ご講演や最近の郷土史の研究成果などのご執筆を頂き感謝致します。また、各工場や会社の皆様には、お忙しいところを御社の堀船における歴史について執筆頂き有難うございました。

この本は初版とは異なり、堀船の有志と町の協力者により作られました。しかし、堀船に住む皆様に是非ともお読み頂けましたら有り難いです。

平成二十八年六月

堀船郷土史を語る会

会長　堀江　毅　堀船一丁目

幹事　北井　正也　堀船三丁目

大室　洋昭　堀船三丁目

田村　重光（庶務）堀船三丁目

田久保海誉（編集）堀船三丁目

「堀船郷土史平成増補版」の構成の解説

「堀船郷土史平成増補版」は複雑な構成になっています。以下ご説明します。「堀船郷土史平成増補版」の前篇は、故田久保周誉著の初版を読みやすく活字を大きくしたものです。

内容は初版と復刻版と全く同じです（1から124ページ）。

旧丁目番地の地図（38ページ）と名簿（39から71ページ）、広告など（72から124ページ）も復刻版と全く同じです。

初版の編集後記（120ページ）も新たな活字の大きさにして読みやすくしました。初版の中の写真はそのまま複製し、使用しました。125ページ以降が新たに掲載した増補部分です。

北区飛鳥山図書館の学芸員の先生方、堀船にあった、もしくはある大工場などの皆様による記事、新に探し出した古地図などが掲載されています。

堀船郷土史を語る会
編集幹事　田久保海誉

目次

とびら……1
堀船郷土史の發行に至るまで……5
本書發行に功績ありし人々……7
序　文……9

前編　堀船郷土史

一、歴史篇
1　郷土の地誌……11
2　郷土の展開……12
3　梶原堀之内村……13
4　船方村……14
5　郷土の支配者……15
6　明治以後の郷土……17

二、社寺篇
1　白山神社……19
2　十二天……20
3　白王山福性寺……20
4　舟方山延命寺……21
5　愛宕地藏尊……22

三、遺跡篇
1　梶原墳……24
2　梶原屋敷のあるじ……25
3　堂の前遺跡……26
4　鎌倉往還……26
5　板　碑……27

四、行事篇
1　せえの（歳納）神の故事……28
2　庚申待ち……28
3　參拝講……29

五、傳説と口碑篇
1　石神井川とその傳説……30
2　齋藤學校……30
3　女体權現……31
4　淺間淵……31

5　往昔の豊石橋一帯 …… 32
6　梶原渡し …… 32
7　彰義隊余聞 …… 33
8　埋　木 …… 33
9　王子電車の開通 …… 33
10　郷戸の長壽翁 …… 34
11　水害雑景 …… 35
12　雷神と落雷 …… 35

六、郷土の生んだ文化
1　寫眞植字機の發明 …… 36
2　完全燃焼機の發明 …… 37

郷土堀船の地域圖 …… 38
堀船町一、二丁目居住者名簿 …… 39
編集後記 …… 120

後編　堀船郷土史平成増補版

一、歴史・遺跡増補篇
1　福性寺所蔵の板碑 …… 127
2　梶原塚と梶原政景 …… 128
3　堀船のレンガ工場 …… 129
4　延宝時代、安政時代の地図について …… 130
5　翻刻：武州豊島郡梶原堀之内村絵図 …… 134
6　都電梶原電停 …… 135
7　梶原銀座商店街 …… 136

二、堀船の大工場
1　東洋紡績王子工場について …… 143
2　キリンビール東京工場の歴史 …… 146
3　読売新聞東京北工場（北区堀船四の二の一） …… 149
4　宝酒造㈱王子工場について …… 152
5　堀船とともに～80年の歩み …… 155

三、郷土梶原の名菓
1　都電もなか …… 157

堀船の町の宝「堀船郷土史」の復刻に寄せて

郷土史を持つ町がどのくらいあるのでしょうか。

昭和二十七年六月一日に「堀船郷土史」は発刊しています。編集発行人は故牧田平次郎氏でした。「堀船郷土史発行協議会」が発行所です。素晴らしい事業であったと思います。著者は福性寺住職、文学博士田久保周誉師です。私の父です。また、堀船在住の我々の父母、祖父母が郷土の歴史の調査や、広告という形で発刊を支持しています。誠に本書の発刊は町をあげての事業だったようです。最近、本書の所在を聞かれることが続きました。また、複写を依頼されることもありました。このため、父の三十三周忌（三十四回忌）と母の一周忌の機会に本書の復刻を計画しました。

本書刊行の目的は、編集発行人の後記に記述されたバッジの意義と同じであると思います。つまり、「堀船の繁栄と人々の幸福を祈願して」でありました。今回の復刻版の目的も全く同様で、先人たちの崇高な希望をかなえようとするためです。

本書発行の完了とともに「堀船郷土史発行協議会」は解散しています。本書は堀船に住む人々の共有財産であるとの認識であったからであると思います。本書発行からすでに六十年がたちました。「堀船郷土史」の発刊に協力した多くの皆様は、すでに鬼籍に入っています。人ばかりではなく、堀船の町も変貌しました。家内工業や木造住宅が密集し、路地では子供たちが石けりや縄跳びなどをして遊んでいた当時の堀船を今や想像できません。

牧田平次郎氏や当時堀船に在住であった町会の皆々様と私の父母を含めた本書の発行にご協力頂いた皆様の霊に本書復刻版を捧げたいと思います。

現在、私の手もとには二冊の「堀船郷土史」が残っています。本書発刊後、父による幾多の追加の説明が書き込まれています。しかし、今回は復刻版として、書き込みを含めて原本のまま印刷することにしました。この原本の中には、印刷や写真に関しては不鮮明な個所が多々ありました。これは元の本が「戦後」という物のない時代を反映して不十分であったためです。しかし、印刷所であるコロニー印刷の皆様の技術により見違えるように綺麗な本に仕上がりました。心から感謝致します。

なお、本書の復刻版の発刊に関しては、福性寺の総代、堀江恒太郎様、石井與一様、大郷道敏様、堀江裕子様、並びにお檀家一同に資金的なご協力を得ました。

平成二十四年九月一日

福性寺住職

医学博士　田久保海誉

前編

田久保周譽 著

堀船鄕土史

ほりふな發行所刊行

著 者 の 近 影

堀船郷土史の發行に至るまで

新聞を發行している関係からか、私を物知りと誤信せられるものと見え、郷土の歴史に関する事や地名等について尋ねられる事が一再ではなかつたが、お恥しい話ながら私は全く之等についての知識を持たない。ソコで知らないと答える外に道がない。

その土地を永住の地と定めてみれば、歴史や傳承を知り度いという事は何人も望む處であろう事はむしろ當然と云はねばならぬ。

福性寺の住職田久保周譽師は西藏語の研究、梵語による佛教の原典を研究せられ、斯學界に於ける權威であり、かつては「批判悉曇學」二冊の大著を世におくり、その後の永年に亘る研究もすでに大成して近く脱稿を見るに至らんとする碩學の人であるが、両三年前より地元の有志の青年諸君を督励して郷土研究にも力をそゝがれる事を知り、郷土史を新聞に發表する事につい御相談をおかけした處が、快諾を得て以來毎号「ほりふな」紙上に連載して好評を博した次第である。

之れが町内の各層に大なる反響をよび、小學校では社會科の教材として採用さるゝと云う向もあり一冊の書籍として發行される事を要望される聲が高まつて來た。一面又、田久保師はその後も東奔西走資材をあさり、研究を進め更らに増補の必要を感ぜらるゝに至つた。

私も又完全なる郷上史を世に送る事の重大なる意義を痛感して刊行の希望止み難きものがあつた。而し此の事たるや公共性をもつ者であり、一人の私すべきにあらずと考えていた處、地元有志諸君が郷土史發行協議會を起すの意ある事を聞き、夢見る如き喜びの内に昭和二十七年三月初旬、一夕青山政行氏宅に會して下相談をした。その會議に進んで參列した諸氏は（略敬稱）

青山　政行	和田　武志
平井　三男	渡邊　喜久造
望月　武	牧田　平次郎

此の會議に於て堀船郷土史發行協議會を起し、予算、設計等を牧田、望月両人に委し、廣く町内

の各團体、有志に呼びかけその具体化を計る事が決議せられ、梶原商店會、商工會、協和會、郷友會、堀船小學校PTA、保安協會、其他有志の人々に呼びかけ、仝年三月二十日、白山神社に會合して協議會を開催した、會議に列席して積極的に意見を述べられたる諸氏は（略敬稱）

青山　政行	小宮山　嘉藏
水野　新治	手塚　喜四郎
水越　勇次郎	小泉　信明
島田　貞七	石神　徳太郎
田中　芳枝	石井　英四郎
白木　馬之助	平山　義範
畑中　孝造	島村　智光
原　武雄	田久保　周譽
牧田　平次郎	望月　武

此の會議に於て

一、郷土史發行に関する事務、其の他一切の必要なる取極め、進行については、牧田平次郎、望月武、に一任する。

一、必要なる諸費用は原則として廣告料金を以て之れに充當する。

一、堀船郷土史發行協議會（假稱）を今日以後、堀船郷土史發行協賛會と改稱し積極的に發行目的の達成に援助を與える。

一、發行の完了と共に同會は自然解散する。

以上の様な事が決議せられ以後、廣告の募集、發行に至る迄の諸事務は發行責任者として牧田平次郎竝に望月武がその任につき、着々事務を進捗せしめて予定の通り發行に成功した次第である。

本書發行に功績ありし人々

全國に郷土史はある。而し村史とか、極めて限られた少地域の歴史が完成したという事は餘り聞かない。而しその必要は痛切なものがあり、各層から熾んな要求があつて、私の生地静岡縣の和地村に於ても、私がまだ小學校へ通つていた幼少の時から村史の編纂と云う事が議に上つたり要望されていた。而し予算の関係や、編輯にその人を得ないと云う様な事に阻害され、遂に今日に至るも實現しない。此の頃村へ行つて見ても此の問題は依然として八釜敷く、その發行が要望されているが未だに實現されてはいない。

私が此の土地に二三十年居住していて、此の町の郷土史を發行する責任者として成功した事はまことに光榮として感激にたえない次第であるが、私は運よく恵まれた土地にすみ、而かも町の同情によつて今日を見たので、私の力によるなどとは夢にも思つてはいない。出來上つて見れば批判は如何様にも出來るものであるが、戰災や其の他災害の爲めに古い記録や其の他研究に必要なるもの、すべてと云つてよい程迄に失はれた今日兎に角にもこれだけの者をまとめ上げた事について、田久保先生が如何に辛棒つよく、根よく、足に任せ、自轉車に乗つて東奔西走して、苦心せられたかを思い、御苦勞の程をお察しすると共に深甚なる感謝を捧げ敬意を表するものである。

殊に相當の日子を費されたるにも拘らず、かつて經済的には一銭の御手つだいもせず、全部自費を以てせられた事は申わけなく、又恥しく考えている次第である。

田久保先生を知り得たと云う事が發行を成功せしめた第一の幸であり、次に此の土地に住むすべての人に愛され、同情を以て迎へられたと云う事が、又非常に運がよかつた事であつて、左記の特筆すべき功勞者の方々と名譽を同じうする事の出來る幸運に恵まれたもので、誠に感激にたえない次第である。

本書發行に要した費用は其の全部をあげて廣告料收入を以て充當した。利慾を離れて義侠的に廣

告を掲載され此の事業に協力せられたる廣告主諸君に深甚なる感謝を捧げて敬意を表する次第である。

　茲に本書の發行に當りて、之を提唱し進んで發行の議を與し、積極的に援助せられたる諸氏の姓名を特記して、その榮譽を永久に保存し度いと念願するものである。

　なを本書の題字は青山政行氏の筆になり、居住者名簿は松村昌信氏の努力編纂により、製版、印刷製本等は鈴木晃氏の努力によるものである事を特記して感謝の意を表する。

本書の発行に積極的に協力さられし人々

（アイウエオ順）

青山　政行
南國造船常務取締役　井出　錦之助
石井　英四郎
石井　與五郎
石神　徳太郎
北井　清太郎
小泉　信明
小日向　寛

小宮山　嘉藏
島田　貞七
白木　馬之助
高橋　要治
堀船小學校長　手塚　喜四郎
間矢　新市
原　武雄
平山　義範
牧田　平次郎
三堀　健次
区議員　水野　新治
村田　嫌二
吉田　喜久
和田　武志

鹿田　定
島村　智光
北区長　高木　惣市
田久保　周譽
都議員　富田　直之
畑中　孝造
平井　三男
堀江　善右衛門
政所　幸次郎
水越　勇次郎
寶酒造工場長　宮本　常男
望月　武
吉田　作次
和田　實

序文

古き皮嚢に新酒を盛るという古諺の精神は日本が漢土の文化を輸入して以來永く日本人の温健な思想を養う一つの傳統的人生觀となつていた。宜たる哉、吾々は過去を知らずして未來を語ることは出來ない。思うに過去は新しきを生む母胎である。譬えば一粒の古き麥種が新しい生命を生吹く如きものであろう。由來歴史を尊重する民族は繁榮し、歴史を忘却した国民は亡国の嘆きを喞つに至ると云はれる。恐らく歴史を高く評價する国民は過去に照して反省し、行動自から中正、氣風又た高邁なる点に於て繁榮を招來するに違いない。吾々は幸福にして古い歴史と佳き傳統を先代国民から継承している。幾多の苦難に打ち克ち、營々と進展を熄めない吾が国民の精神力はこゝに潜むのであろう。

凡そ国の正統的な歴史というものは權力の爭奪とか、諸外国から蒙つた変動とか、多くは時代の推移の表面に露出した事實を羅列し、當代民衆の實生活には疎遠である。深く思いを致した場合はこれと別な歴史所謂民族の文化史が連綿と續いたことに氣がつくであろう。即ち戰乱や社會情勢の變革なぞ、大きな正統史的事件をよそに民衆の生活は平穏であり、表面に表はれた変革を巧みに消化しつゝ、脈々と續いたものである。譬へば、河水の表は波立つても靜かな底流は徐々に而も間断なく續くと同様であつただろう。實はこれが吾々に最も生きた親近な歴史である。父祖の温かな息遣いさえ感ずる郷土文化の跡でもあり吾々に深い愛着を搖り起さずにはいない。

筆者は昭和二十二年春から郷土堀船町の知識的青年層と共力して郷土史の研究に着手したが翌年七月この有力メンバーだつた国大生牧田平八郎君の三つ峠に於ける遭難死の災害なぞが起り、同君分擔分野である江戸時代文献調査は空白のまゝに殘つて此の研究會も一時中絶の態になつた。然るところ昨夏同君嚴父にして「ほりふな」新聞主幹であられる牧田平次郎氏から此の成果を紙上に發表するよう御慫慂を受け、急遽空白の部分を調査して

未定稿として同紙に連載した。其の間更に當地の古老の間を奔走して口碑の収録に努め、且つ連載中の讀者数氏から新史実の教示を受けたりして一段と内容を擴充することが出來た。何分にも堀船町という限られた範圍ではあつたし文献資料は甚だしく尠ないが大体に於て二三の既刊郷土史、若干の江戸時代の地誌、福性寺所有文書、古石刻文及び古老の口碑等を基礎として纒め上げたものである。

筆者は一介の佛教學徒であり考古學や歴史學には全くの門外漢であるが、傳統と歴史を尊重すべき立場上且つは郷土を愛する情から不才を顧みず敢て此の業に先鞭をつけたのである。近世になつて出版されている郷土史研究成果に逸して居る郷土堀船町の歴史を耳にする限り細大となく類集網羅したつもりであるが慮外の粗漏があるかも知れない。貧しい拙稿を更に校訂の上各位の机上におくることの僥倖に會つたことは偏えにほりふな新聞主幹牧田先生の御推挽と町内有力者各位の資助に因るものであり、且つは古老二十数氏の懇切な御教示に負う所であつて讀者と共に謝意を捧げ度い。

昭和二十七年三月彼岸

筆　者　誌

堀船郷土史

田久保周譽

一、歴史篇

1　郷土の地誌

飛鳥山を經て上野に連なる一帶の台地には近年になつて数回にわたつて繩文式土器や種々の石器が出土している。從つて此の地域には石器時代にも文化が繁榮したことが知られる。之に反して王子、川口、岩淵などを結ぶ範圍の低濕地帯が住民の居住地として利用されるようになつたのは比較的後代で、平安朝（約千百年前頃）までは王子岸町は東京灣のなぎさであつたと云はれる。當時の王子は岸村と呼ばれ、水江の岸という意味で斯う呼ばれていた。かつて岩淵附近の田甫の中から古代の船が發掘されたり、旧英工舍附近にある貝殼塚の如きは或る時代に東京灣が深く灣入して、船が運航し貝拾いの生業も營めた臨海地であつたことを推測させる。殊に川口市はかつて荒川の河口であつたと云う所を見れば現在の吾々の足下に踏む大地は當時茫々たる海原であつたろう。從つて郷土堀船に関する上代史料のないことは無理からぬことであり、海底に眠つて居た時期は比較的長かつたのである。

平安朝より三四百年降れば堀船一帯の地誌は幾分明瞭になつてくる。福性寺境内には南朝後村上天皇時代の暦應二年十二月（六百十二年前）建立の板碑及び後小松天皇代應永四年八月（五百五十年前）のそれ等、其の他足利時代の石碑は夥しい数である。又寶酒造前、梶原踏切を經て上中里に通ずる道路を鎌倉往還と呼ぶことも有名である。恐らく此の經路は常陸下野方面から當地を經て時

の政治中心地、鎌倉へ行く間道であつたとも見られるがむしろ次に記す豊島氏が鎌倉幕府に參覲した要路と見る方が自然である。

治承四年（七百七十二年前）東国に擧兵した源頼朝を卒先支援した豊島清光は郷土の北隣豊島の地に蟠居した豪族であつた。これらの諸資料から見れば郷土一帯が陸地となつて庶民が農耕を営むようになつたのは遅くとも約七百七十年以上の昔であつたことは明らかである。

更に降つて足利時代永録年間（約四百年前）の小田原北條氏康時代制作の江戸見取圖には荒川に沿つて豊島村、梶原堀之内村、尾久村なぞと地名及び地形が圖上に示されている。船方や、郷土、中里等の周圍の地名は見られず、特に梶原を出していることは當時比較的に梶原が著名な農村であつたと思はれる。恐らく水害もさることながら、生活に利便の多い水邊で且つ信仰行事にも地の理ある寺の近邊に發達した米作小農村であつたと思はれる。

2　郷土の展開

こうして漸次米作農村として徳川時代に及んだのであるが、郷土梶原堀之内は南北の二部落中、豊島村とは幾多の血族干系を保ち、尾久村方面とは比較的交渉薄く、主として郷戸部落を梶原の一部として密接なる部族関係を續けて來たらしい。これは小宮石井の姓が前記の各地に共通して殘つていることからも推察する事が出來る。福性寺所有の徳川中初期の文書によれば、梶原本邑或は略して本邑と記している。往昔今の大東煉炭會社の敷地に屋敷を有した石井鍈衛門氏の家号は古來「本村の家」と呼ばれている。恐らく本村の宗家という意味である。筆者は郷戸の古老からその先祖はかつて梶原に居住したのであるが、屢々の洪水に困却して郷戸へ移住したという口碑を仄かに聞いた。これらの点から見て溯つて部落形成の初期には梶原堀之内は、現在の所謂梶原地區が本村であつて此の地から漸次郷戸方面え展開したものと思はれる。

勿論それ以前に部落が出來たとは思はれるが、

庚申塔

郷戸に関する早い記録としては改正道路沿い政所塗料店向いの庚申塔である。これは将軍家綱時代承應二年十一月（二百九十九年前）の建立で、施主九人を連名して居り、次に澤部新太氏住宅西側の庚申塔二基中一は延寶三年十一月（二百七十七年前）の建立で、十名の施主が名を連ね、他の一基は寶暦五年十一月（百九十七年前）建立で十二名の施主連名がある。庚申待は元來儒道二教によつて中国に發祥した行事であつて、佛教の暦學に混淆して吾が国に傳來した。之は土俗信仰となつて庚申の宵に行はれる全部落の行事であつたからこの石碑の連名は略ぼ當時の郷戸地區の戸數と見て差支えない。又寛延三年（二百二年前）幕府の檢地の際には梶原堀之内全体で戸数四十六であつたと記録されている。

郷戸で最も古い家柄と云はれる小宮孝茂氏屋敷内にある先祖の古塔は足利幕府末期の明應十年九月（四百五十年前）の刻銘がある。これらの資料を綜合して見ると郷戸は略ぼ足利末期に發祥して其の後戸数の増加は比較的緩慢で、徳川時代後半期になつて戸数は梶原堀之内全体のほゞ三分の一程度であり明治初年には二十戸を数えたらしい。延寶年間以降の福性寺所藏記録には此の地は度々神戸、合戸なぞとも記入されている。いづれが古來の正統的名稱であつたのか不明である。或人によれば往昔、かつて此の土地に神戸某という武士が居住した故事によつて斯く呼ばれる様になつたというが、確実ではない。

3　梶原堀之内村

梶原という郷土の地名は比較的古い時代では前に記した小田原北條氏康時代（約四百年前）の江戸地圖に現はれている。此れには梶原堀之内村と呼んでいる。降つて福性寺門前にある天和二年（二百七十年前）建立の地藏尊の刻銘には武州豊島郡梶原堀之内村とし附近にある別体の安永八年（百七十三年前）建立の一尊の刻銘にも同様梶原堀之内村念佛中と記してある。これは戰国以來徳川末期まで郷土一帯が梶原堀之内村と呼ばれたことを

立證するものである。従つて明治以後大東京改編に至るまでの間、大字堀之内小字梶原乃至は郷戸と呼んだのは古來の傳統的な名稱を正しく継承したものではなかつた。

東京都教育廳に出仕される関八州の郷土史研究家稲村坦元氏はかつて當地に來訪された折に次のように語つた。

「堀之内とは戰国時代の豪族の據点、即ち陣屋を水濠で圍繞した區域を指すものであつて、各地に此の名稱が散在しているのは群雄割據時代の遺稱である」

と。恐らく此の解説は傾聴すべきである。梶原堀之内というのも豪族梶原氏の陣屋周邊の地域に名付けたのであつて、其の眞意は梶原家之堀之内という程のものであつたろう。

郷戸の堀江平次郎氏の談によれば、雑司ヶ谷鬼子母神で有名な新田堀之内は郷土梶原堀之内の飛地であつて徳川時代末期迄両地の間には交渉があつたと云う。然りとすればこれは梶原堀之内の新田と云う意味で新田堀之内と名付けられたのである。一方、新田堀之内にも此の事情を裏書する傳説が殘つて居り、大体元禄年間に分郷が行はれたという。此の地は明治維新まで梶原堀之内と同様に水野、齋藤の両幕臣と寛永寺に分領されていた。

4　船方村

船方は現在堀船町二丁目地域の古地名であつて昭和初年當地が大東京に編入されるまでは王子町船方と稱し、旧幕時代までは船方村と呼んだ。此の地はかつて尾久村から分郷したと云はれる。一説には船方は地名類聚抄豊島の條に現はれる七郷中の一占方（字良加太）郷の故地であつて、此の古地名が轉訛して船方となつたのであるというが、此れは更に一段と考證しなければならない。大体地名類聚抄は朱雀天皇承平年中(約九百六十年前)に編纂された明確な歴史を有する文献であつて、此の頃に郷土一帶が陸地となつて土着民が居住したことは頗る疑はしい。恐らくこれは両地名が類似する点から着想した以外のものではない。船方の「方」とは大言海によると一義に「其の方の人、組、仲間部」などという意味があるが、此の語義から推察すれば、恐らく「船の組、船の仲間」と

いうような寓意に於て名づけられたと思はれ、水邊に生業を營んだ部落を呼んだものに違いない。此の地は昔舟方と書いたようである。小田原北條氏康の永録役帳にも延命寺西側にある正徳二年（二四〇年前）建立の地藏尊石刻文にも舟方と誌してある。

船方村の郷土歴史も容易につかめない。傳説によれば延命寺は應永年間（約四七〇年前）遊園地前の字小橋から現在の地に移轉したと云はれる。かつて明治中葉の頃、田中榮吉翁の父祖が煉瓦製造のため小橋の土を採取した際に夥しい古銭が出土し、人々はその地点が延命寺所在の旧跡であつたことを知つたという。

従つて延命寺はその敷地に現存の地藏尊小宇を殘して移轉したのである。そのためか船方では最近までお盆の折には此の地藏尊まで精靈さまを送り迎えしたと傳はつている。其の後寺は安政二年に火災に遭つて、一山全く烏有に歸して記録も失つた。こうして移轉と火災の爲め古板碑とか記録が殞滅した爲め調査の素材は乏しい。

船方の旧家石神與八氏宅には家系譜を藏して居り、文明、永禄の頃に既に當地を開拓して居住したことを傳えている。これは今から四百八十年程昔にあたり、梶原一帯が凡そ七百年以上の過去の歴史を推定することが出來る以上既にその當時農村が發達していたことは當然である。

其の後徳川時代に入り寛永三年（三百二年前）幕府の檢地に際しては戸数二十四戸であつたと云はれ、古老の談によれば明治初年にも戸數は小橋十二、船方本村十二、計二十四戸であつたと傳はる。

此の地は明治二十一年四月町村制發布によつて王子村が成立する際、とくに地理的便宜のために大字向端のうち東部の二五五番地以上を上尾久に編入した。これは現在の遊園地の東部分から尾久変電所一帯の土地である。

5　郷土の支配者

鎌倉時代、今から凡そ七八百年前頃から我が郷土史は仄かな黎明となるが、其の初期の暫らくは標題の問題は明かではない。今は當時の情勢を綜合することによつて想定を試みよう。

文治五年（七六七年前）頼朝の東征に従軍した豪族豊島清光を初めとして一族は其の後も源家に忠勤を捧げて居つたから、執權北條氏を經て足利幕府の成立頃迄豊島氏は吾が郷土一帶をも併せ支配したに違いない。其の後此の間の事情を偲ばせるものとして次の資料がある。福性寺所在の板碑のうちに足利將軍義教時代の正長三年（五一六年前）五月という刻銘をもつたものがあるが實は正長は一年丈けで改元して此の年は永禄三年に相當する。更に他の一は福徳二年（四五八年前）八月と年代記しているが、これは私年号であつて朝廷の欽定年号は延徳二年である。こうした年号僭稱は朝廷に對する反感から鎌倉の関東管領家が敢てした處である。從つて今を去る五百五十年乃至四百五十年の間は関東管領家の支配下にあつたのは明瞭であつて、更に細かに云えば管領家の家老上杉家に隨順して居た豊島氏が續いて領して居たであろう。

豊島氏がその後宗家上杉に背反したゝめ文明九年（四七五年前）扇谷上杉の家老太田道灌に滅されて後は地形上から見ても太田の配下にあつたろう。其の後天文、永禄年間になつては小田原北條氏が當地一帶の覇權を握り、永禄二年（三九二年前）の文書によれば梶原、船方なぞは北條の部將太田新六郎の所領となつていた。梶原政景は凡そ此の時代の一小領主であつたろう。天正十八年（三六二年前）秀吉の東国征討後は當然其の治下にあつたと思はれる。藤堂和泉守が一時郷土の領主となつて白山神社を造營したというのは豊臣氏の時代であろう。

田中榮吉翁の談によれば、現在荒川遊園地のある小台向端は明治末年まで屋敷の山と呼ばれ、そのかみ藤堂和泉守の下屋敷があつたと傳えられたという。

徳川時代になつてから梶原堀之内は水野、木村、齋藤等の各鷹匠及び寛永寺に分割食領とされ船方は寛永寺領となつて明治に及んだ。幕末寛延年間（約二二〇年前）堀之内全体で戸数四十六戸、石高百八十石に達し、船方は二十四戸五十石餘であつたという。亡石井與五郎翁の記憶によれば、明治初年の梶原は全体で二十二戸の農村であつた。徳川初期以來の梶原の地頭は水野藤右衛門と云い、その長男信定は延寶八年死歿して福性寺に埋葬されている。傳説によると信定は劍道練達の強豪で

あつたが、故あつて菩提所駒込吉祥寺をさけて所領地の福性寺え葬つたという。今も墓碑が残り本區十條町に居住する子孫が守つている。

明治維新の後當地一帯は武藏縣知事の所管となつたが、其の後間もなく編成替へによつて浦和縣に編入された。明治四年には再び東京府に復歸して府下を六大區に區分したとき當地は第四區に屬した更に明治六年に區域變更があつて梶原堀之内と船方は第九大區第三小區に分屬した。

明治二十一年四月、市町村制施行と共に王子村を編成して今日に至つたのである。

6　明治以後の郷土

明治時代に入つて東京が帝都となり周邊は近代工業が勃興する氣運に向つたが、先づ明治四年石神井川べり郷戸の對岸に澁澤榮一氏の主宰した王子製紙會社が設立され、續いて明治八年印刷局抄紙部が設置され、各地から工員が定住するようになつた結果、地形上先づ郷戸方面の人口は漸次に増加した。當初は農家の別棟とか奥座敷なぞに寄宿していたが、遂に明治二十年頃には貸長屋が建築され初めた。それにしてもその當時は郷戸から南の田野を展望すると淺草の五重塔、十二階なぞを一望の裡に収め得たといはれる。降つて明治三十九年には東洋紡績の前身たる下野紡績が船方の北角をトして工場を建設するに至つて漸く梶原、船方方面にも繁榮が波及するようになつた。明治十年頃は郷戸廿五戸、梶原二十五戸、船方十二戸に過ぎなかつたのが、同四十一年頃の梶原には此の外に現在内田自轉車店の位置の八軒長屋、寶酒造北側道路沿いの四軒長屋なぞを加えて二十戸ばかりが増加した。船方にも大正五年頃には旧來の居住者の外に十二三戸の家屋が新築された。斯うして緩慢ながら絶えず發展を續け、更に下野紡が三重紡績となり三轉して三重紡績を東洋紡績會社が買収經營し、大正六年頃にその西側に第二工場を建築するや、大正十二年當時の極盛期には男女工合せて二千三百名にまで達したので勢い當町は益々人口が漸増し、その頃の梶原の戸數は約四百に上つた。その頃には旧來の土着者も概ね農耕を廢して一帯は半都會風の地區となつた。

大正十二年大震災の際は當地區の地盤が軟弱な

せいか大半の家屋は倒壊し、現在の梶原銀座の商店街の如きは殆んど軒並みに壊滅した。其の後町は急速に復興すると同時に東京市民が大震火災の惨憺たる苦難に慄えて都内から移住するに及んで急激に立錐の餘地無き住宅地となり、殷賑を極めた。やがて三輪方面から延押して來た都市計画による環状線道路は、昭和五年當町西角を縦断完成して淺草方面との交通は至便となり戰災前昭和十七年頃の極盛時に戸数は郷戸八百二十、梶原千七百餘、船方二百二十餘に及んだ。次いで太平洋戰爭の戰火は梶原の神社及び寺とその周邊少数の家屋を殘して一木一草も餘さず一望の焼野原と化せしめたが、戰後營々たる努力により漸次工場兼住宅地として復興しつゝある。

二、社寺篇

1　白山神社

村社白山神社は伊弉那岐尊を祭神として昭和四年村社に昇格した。當時の町會理事者たちは村社に列するための歴史を模索するのに非常な苦心をしたと云はれる。

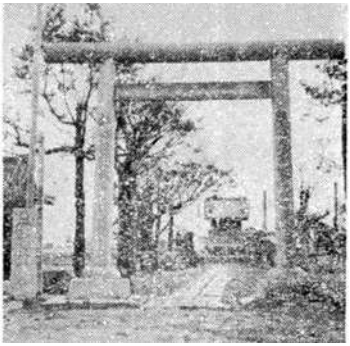
白　山　神　社

恐らく徳川時世に入る前、豊臣秀吉の関東平定頃と思はれるが、かつて此の邊一帯が藤堂和泉守の領地となつた頃彼れの命令によつて此處の社殿は修築されたことがあつたという。吉宗時代の北町奉行記録によれば、此の神社は當時福性寺住職が別當に任ぜられていたと記してあるが、明治二年神佛分離の太政官布告が下るまで其のまゝであつた。

古老の話によると明治十年頃の五月十五日の「ぼんぜん」という祭禮には麥苞に氏子の数丈けの紫白赤なぞ五色の紙でしつらえた御幣を挿し立て神輿として現在の梶原渡しの場所え擔ぎ出し一同裸形になつて「歸命頂禮懺悔々々六根清浄」と唱和しながら各自に河水を浴せ合つた後、御幣を手に手に持ちかえり家々の庇にさして悪魔退散の守符とした。其の後五月二十日頃になると巡行して隣村まで來ている北足立郡平方村の獅子面を、村の年番が奉迎して歸村し梶原と郷戸が年毎に前後番となつて村中を練り歩き、同時に豊島、中里なぞの村境に各々二本の生竹を樹て〆縄を張つて郷内え悪疫の侵入するのを防ぎ祈つたという。また平方の獅子面が巡行に出達する前祭には必ず村から代表が列席するをつねとした。此の獅子面の巡行は瀧野川あたりでは今だに行われている。

現在此の神社では大祭を九月十九日、中祭を五月十九日に執行している。

2　十二天


船　方　神　社

村社船方神社は神佛分離後日本武尊、大国主神、少彦名神猿田彦神を祭神とし、大正十一年十二月村社に昇格した。

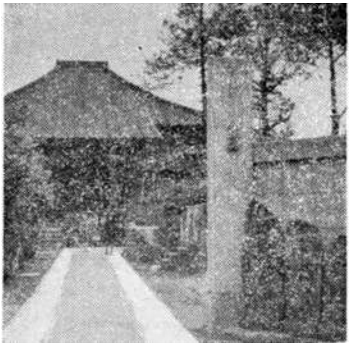
此の社は幕末まで十二天或は十二社とも異稱した。もと豊島清光の息女足立姫が破鏡の悲しみから入水した折、これに殉じた十二侍女の遺骸がこゝに漂着したので之を十二天として祭つたという傳説がある。

思うに十二天とは恐らく佛教、殊に密教の教義で佛の付托によつて一日十二時を分擔して世間を守護すると信ぜられた金剛等の十二神将を指すと信ぜられる。

そのかみは十二侍女の奉仕の極地を世間守護に任ずる十二神将の神格になぞらえて崇拝したのである延命寺の陽の方向に當り、而も眞言宗の天部を祭祠したことは寺と神社との密接な干系を暗示している。恐らく延命寺が現在地に移築された頃、寺僧が地鎮神祇として祭つたのであろう。此の神社でも大正年間まで「ぼんぜん」の祭禮が行はれ、現在四十五六歳の壮年たちは唇を紫色にして河の水に浸つた少年の日の思い出を懐しんでいる。現在大祭は九月八日、中祭は五月八日に執行している。

3　白王山福性寺

この寺は現在眞言宗豊山派に所屬し、境内墓地總計八百九拾坪、檀徒二百餘を有している。徳川吉宗時代(約二百五十年前の北町奉行記録には「當地年數不知、本寺沼田村恵明寺末　眞言宗福性寺、寺内三十間四方」「當地白山權現、年數不知、宮地表二十間、裏十八間、右福性寺懸持」とあつて大体當時の規模を想像することが出來る。これによれば傳説に知られている通り白山神社が福性寺の



福 性 寺

神祇であり、且つ當寺住職が別當職に任じていたことは明瞭である。

白王山という寺の山号と白山神社の名稱との間にも密接な連繫があつたに違いない。それ以前の歴史は屢次の火災或は無住職時代の荒廢なぞの爲めか明瞭を缺いている。寺自身の傳承する古文献も古くは寛永年間（約三百三十年前）を頂点として夫れ以前の歴史は沓として明確ではない。然し乍ら境内には前に云つた通り足利初期暦應二年建立の板碑が現存し、遅くとも六百十餘年前には既に部落の菩提寺が造立されてこゝに佛教宣布の法鼓が打ち鳴されて居たことは疑えない。境内殊に本堂所在敷地は一段と高くなつて居り、此の地の祖先が會つて默々として祖廟建設の爲めに土盛りの浄業に汗を流した跡が偲ばれる。

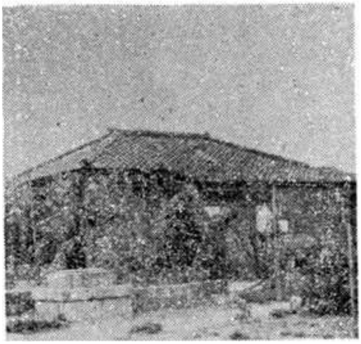
寺域の中には梶原一族の古墳がある。これは前述のように明治三十七年夏、陸軍工廠構内から移轉したものであつて現存は主墳一、五輪塔一、小墳六基から成立つて居る。小墳の二基には梶原一族追善の爲めに造立した經緯を述べた石刻文がある。

現存の本堂は大正十二年関東大震災に倒壊した後を享けて建立された椅子式の假本堂であつて、大平洋戰争前鉄筋コンクリート近代様式本堂として改築の方針が決定し、資金の勸募も完了した。時恰かも戰争熾烈となり、果ては敗戰に終つて遂に此の計画は實現しなかつた。然し偶然戰火に類焼するの難を免れて戰前の規模に少分の改修を加え現形を保つて居ることに不幸中の幸いであつた。

4　船方山延命寺

この寺は眞言宗豊山派に所屬し、墓地境内總計六百七十坪餘り、檀家二百十餘戸を有する。

屢々の火災或は荒廢の時代があつたらしく寺自身の有する文書は安政二年（約一〇〇年前）の火



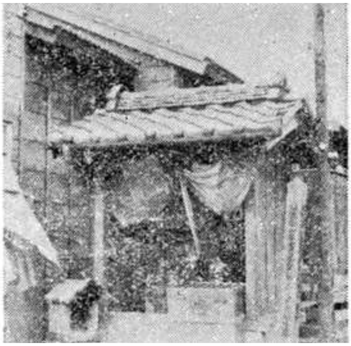
延　命　寺

災以後のものである。徳川吉宗享保年間（約二四〇年前）北町奉行役帳には「當地年數不知中本寺與楽寺末、眞言宗延命寺、寺内云々」と記録してある。

船方村の項で述べたが此の寺はもと遊園地前字小橋から應永年間（約五五〇年前）に現地に移轉したと傳えられている。これによつて當寺が悠遠な歴史を持つていることが知られよう。又現地には古板碑、石刻文などが傳はらないのは恐らくこのためであろう。

當寺の建造物一切は昭和二十年の戰火に遭い全く烏有に歸して現在は假堂を建立して禮拜の用に供している。將來は更に伽藍を整備して面目を改むる方途を推進中である。

5　愛宕地藏尊



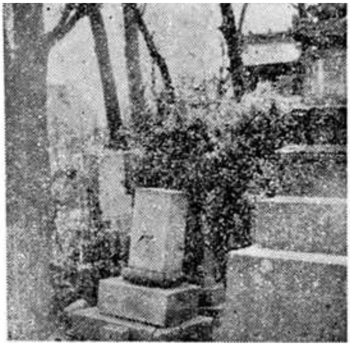
愛宕地藏尊

此の小宇は往昔から小泉初太郎氏の先祖が代々奉仕して居り、もとは市川履物店の背後あたりにあつた小泉氏宅地内に立つて居られた。大正末年になつて小泉氏が梶原銀座通りに店舗を構えるようになつて現在地より稍奥の露路沿いに移轉したが、更に戰災後現在地の商店街沿いに移されたものである。此の尊は徳川期の始め以來地頭水野家から少額ながら年々供米、灯明料を寄進されて居たと云はれ、由緒古き佛宇であり、限病平癒の祈願佛として尊崇されていた。聞く處によれば、そのかみ小泉氏の祖先が本郷の水野氏邸から此の地に勸請したと云はれる。昭和初年以來商店街の奉贊によ

って縁日が開かれたが、戦後毎月三の日の祈願佛として人出に賑はっている。

三、遺跡篇

1 梶原墳



梶　原　塚

梶原堀之内という古地名の起源となつている梶原墳は、明治三十七年迄後藤半七氏宅北側の陸軍貯炭場に在つた。同三十七年夏軍工廠擴張の際福性寺境内に移轉して今日に及んでいる。移轉工事の節寶篋塔の下から古銭、馬骨らしきものと共に蛇なぞが出て來たと云はれる。古老の話によると、當時此の塚は荒川の水邊に近く土饅頭があつて、夫れを取り圍んで寶篋塔と數基の石碑が立ち並び、周圍には數本の大樹と竹や雜草が生い茂り足を踏み入れる人とてなかつた。明治中葉頃にはこゝに大きな胡桃の木があつて季節になると里の子等は此の實を拾つて楽んだという。

今から約二百五十年前将軍吉宗時代の北町奉行記録には此の地について次のように記してある。

當地年數不知、本寺沼田邑恵明寺末、眞言宗眞龍寺、寺内百二十坪云々。

此の記録によれば、當時此處に眞龍寺という寺があつたことは明らかである。石井鍈衛門氏は此の地にかつて同名の寺があつたことを父祖から聞き傳えて居り、故人となつた石井與四郎翁も此の地に元祿年間（約二七〇年前）何處からとも無く流浪の比丘尼が來て庵寺を修築して居住し、當時里人が此の人は梶原氏の縁者であると語り合つたという口碑を傳承して居られた。

福性寺に移された石碑にも「文政九年…………梶原墳眞龍寺」と記した墓誌がある。こうして見ると今から凡そ百三四十年前迄はこゝに梶原墳を守る眞龍寺という佛宇があつたことは明かである。此の塚一帶には固と夥しい石塔があつたが、荒川の屈曲点にあるため河岸が漸次浸蝕されるに從つて尠からざる石碑、石壇等が河中に陥没してしま

つたと云はれて居る。
　思うに此の七八畝の土地は郷土を占據した梶原氏の屋敷跡であつて、後代一族の冥福を祈るためにそのまゝ寺として眞龍寺と呼んだのであろう。

2　梶原屋敷のあるじ

　梶原墳のあつた旧梶原屋敷は曾つて梶原源太政景の館跡であつたと思はれる。天文年間から永禄年間（四三〇―三九〇年前）にわたつて居城岩槻を本據として松山城、川越城などの争奪をめぐつて、越後の謙信を背景に小田原の北條氏康と劫争を續け、敗れたりとはいえ上總の雄里見義弘を勸誘して相共に北條氏康の大軍を迎えて永禄七年(三八七年前)下總鴻台に関東の覇を争つた太田美濃守資正は彼の父である。資正には長子資房次子妾腹の政景があり、外に一女子があつたが、永禄末年の頃になつて、城中は資房、政景両派に分裂して内訌を惹き起した。政景は利あらず岩槻を追はれ、剰え資房一派は敵方北條氏政と款を通ずるようになつたので、父資正も常陸に亡命して佐竹重義の許に流寓した。政景は岩槻を立退いて後、父の流寓には随從せず、梶原美濃守政景と名乗つて武藏國豊島郡に住したというから近郷の覇者豊島、太田両氏が衰亡した以後永禄年間から天正年間(三九〇‐三六〇年前)の頃迄此處に住したと思はれる。之より先、彼は足利義満時代に関東管領家の部將として関東に住し康暦二年下野の住人小山教義の反乱を鎮定した梶原美作守道景の第三代を嗣いだのであつた。
　養家梶原累代の家系や當時の勢力関係から判斷すると、政景は梶原に在つて小田原北條氏の支配下にあつたに違いない。
　然も當時郷土一帶は永禄初年以來北條氏から太田道灌の孫にして又政景の同族であつた太田新六郎資康に領邑として授けられていたので、恐らくその庇護の下に立つた一部將であつた。こうして時によつて敵味方に向背ある流轉の變相は、戰国部將に敢て奇とするところではなかつた。孰れにしても永禄初年の小田原北條氏の地圖に、郷土を梶原堀之内と記入している以上政景はそれ迄には此處に住していたのである。鎌倉大草紙には政景の養祖父道景の末子景則は甲斐の国に移住して謙

信に仕えたと傳えている。天正十八年（三六二年前）豊臣秀吉の東国征伐後天下の争乱は全く平定して渺たる一武將の武断は許されなくなつた結果、實父資正が後年佛門に歸依して三楽入道と稱した先例に倣つて彼政景も或は眞龍とか稱してその館を佛宇として俗塵を絶つたのであろう。且つ此の地に墓碑、墳なぞの殘つたのは彼が此處で終焉したことを物語つている。

一体小田原北條氏は日本外史にも見える通り秀吉からの歸降勸告を屢々拒否し、遂にその征討を受けて滅亡したので敗戰後北條一族は秀吉に登用されていない。支配下の政景も同樣の環境にあつたと思はれるが、此の後約九十年を經た元禄年間に流寓して來た比丘尼なぞも、恐らく傳説のように落魄した政景の縁者であつたろう。

3　堂の前遺跡

堂の前は小字名にも殘つて居り、内田自轉車店横の防火貯水池の位置に相當する。明治末葉までは石碑が二十基餘り殘存していたが、其後次第に失はれたと云はれる。福性寺記録によれば、今から凡そ二百年程前には此處に宗福寺と稱する一宇があつたらしく其の後此の寺の檀家は漸次福性寺え吸収された。その堂宇に因んで堂の前と呼ばれたのである。明治の中葉までは大雪がふると此處を境として郷戸と梶原で道路の雪掻き作業を分擔したという。

4　鎌倉往還

これは鎌倉間道とも呼ばれ、豊島西福寺脇から寶酒造横を經て梶原商店街を縦貫し、環状道路を横斷して平塚神社に至る古道である。此の道路は常陸下野えの間道というよりは、むしろ隣地豊島郷の豪族豊島氏が時の權力鎌倉幕府に赴く場合の通路であつたと思はれる。從つて略々七百年來の古道であつた。かつて此の道路の歴史を惜む何人かによつて梶原と中里の境界即ち今の環状線道路との交叉地点に「鎌倉往還」と刻んだ石碑が建つて居たと云はれ、十年位前までは殘存していたのであるがいつの頃からか姿を消しているが惜しいことであつた。

5 板碑

板　　碑

板碑とは高さ概して二尺五寸前後の平版型をなした石に諸佛の梵字或は戒名なぞを誌して供養追善のために造立したものである。下部は現行の塔婆のように尖つて居り、恐らく土饅頭の上に挿し込むに便ならしめたものである。原石は秩父の緑磐石の一種であり、人によると、四国伊豫の濱石に似ているともいう。現存する板碑中練馬谷戸の白山神社頭にある弘安年間造立のものが凡そ六百七十年を閲して居り、稀に古きものとして有名である。

福性寺境内には南朝後村上天皇の暦應二年十二月に建立され、爾後六百十二年の星霜を經た一基の板碑がある。これまた近郷で發見された中では屈指の古碑である。表面には諸佛の名字を刻み、蓮花二瓶を彫刻して一種の供養塔の形式を採つていて戒名は誌して無い。勿論此の時代に在つても富裕者の墓碑は五輪塔なぞの贅を盡したものであつたが邊陬の庶民は一桂毎の石碑とてなく、一基の板碑に誠意を托して父祖群靈の惣供養塔としたことが明かである。それにしても馬背か或は船運に因つたか数日を費して平地まで搬出した此の片々たる緑磐石は當時の庶民に寶石のように貴重な資料であつたに違いない。

四、行事篇

1　せえの（歳納）神の故事

　これは毎年正月十四日に部落の男児達の間に行はれた楽しい神事であつた。歳の暮れに奉遷した神棚の祭供や新年の儀式に使用した御神供、さては門松なぞを共力して戸毎に蒐めまはつて一個處に集積し、天を焦すような大焚火として焼却した。此の際蒐集の少年たちの手には各戸から二三枚の銅幣が贈られ、終つて各自に平等に分配された。少年たちは各々家から餅を携えて來て此の焚火に焙つて食べ、叉一年中の風邪外け薬として焙り餅を家族えの土産物として家路についたといはれる。恐らくこれは関東北部から東北地方に今日も行はれている「どんどん焼」の行事であつた。

　此の行事に従う児童は最高十五歳までとされて居て、部落中の十五歳の少年が年少者を指揮して行つたのである。當番の少年は當年の首長として行事を主宰することに晴れがましい誇りを感じたが、來年は成人の仲間入りをして此の少年行事の會衆を脱しなければならないという淡い感傷があつたという。

　此の行事は郷戸、梶原、船方三部落別々に行はれ、郷戸では政所塗料店向いの庚申塔の邊り、梶原は内田自轉車店向い貯水池の堂の前故地、船方では東洋紡績構内となつた庚申塔の近傍で夫れ夫れ執り行はれた。こうした少年の日の思い出は、現在四十五六歳以上の人たちの遠い夢に連つているらしく郷土の懐旧談には屢々出てくる話題である。それにしても強いて成人の世界へ引き込まれようとして居る現在の少年たちに比較して當代の彼等はまことに墨繪の中に在る人物のように茫洋として又大らかであつた。其の後各種の事情から大正中期を境として此の風習は絶滅した。

2　庚申待ち

　部落の定例行事の中で庚申待は傳統豊かな古い儀式であつた、此の儀式は佛敎と道敎とが混淆して初めは中國に自然發生的に起つた土俗信仰であつた。人の壽命まで左右する全能の上帝に使者の

三猿が、庚申の節會に次回の死者を上申指名する災厄を攘う爲めに、徹宵猿に奉仕するという信仰から起つた極めて古い儀式であつた。本邦に佛敎が傳來すると共に此の信仰も將來されたが、吾が国では斯る陰惨可畏な内容を捨て一部落の懇親機関として永く傳承されて來た。

此の諸部落にも庚申會が行はれたが、例を梶原に取ればもと石井與五郎氏邸の南側に在り、現在福性寺門前に移祠されている庚申塔を祭神として部落二十数戸が戸毎に月番で宿となり、夜を徹して庚申待のお籠りをし、當夜は夫婦の同衾が禁忌とされたという。當番の家には祭神の軸を掛け灯明供物を設け、祈願誦出の後に各自米三合に十銭持ち寄りの會費で御馳走を調え、夜の更けるのも忘れて慢談怪談に一夜を語り明かしたと云はれる。

3　參拜講

各部落には伊勢講、富士講、大山講、御嶽講などの參拜講があつた。これは各々講名の社寺え參拝團を送るために毎月輪番で各戸から集金して掛金を集めて蓄積しておく相互扶助の團体であつたが一面には村の融和機関としての使命を果した。例を郷戸の伊勢講に取れば、四軒の年番があつて毎月一月十一日各戸から「五合五ぢゆう」と謂つて五合の白米と五厘の鳥目を集め、これで當時としては大變な御馳走であつて、白米飯とにしめを調えて晝間は小児たちに存分に振舞をして、夜になると各戸から一人宛成人が宿の家に集合して伊勢參拝の代祈願をした上饗應を受けたという。

五、傳説と口碑篇

1　石神井川とその傳説

石神井川はその源を石神井三寶寺池に發して音無川となり、飛鳥山の裾をめぐつて堀船町と王子、豊島との境界を劃しつゝ荒川に注いでいる。

郷戸の堀江平次郎氏の祖父は往昔幕府の命令によつて河幅を擴張し修築を宰領したと傳えられる。

此の川は高台を貫渡するために河岸高く近郊にめずらしい渓谷美さえ見せているが、上流の降雨時には渦巻く激流となる。旧幕府時代豪雨の日に上流から奇怪な大獅子の面が漂流して來て、之を追つた郷戸の若衆某は激流に呑まれて行方が知れなかつたという。

徳川時代から明治初期にかけて郷戸の旧居住者には此の川にまつはる傳説が語られていた。いつの頃か此地の里人が馬を曳いて他出の歸途、上野の近くで見馴れぬ美女に遭い、乞はれるまゝに馬の背に載せて石神井三寶寺池のあたり迄行つたところ、突然此の女性は蛇身に變化して池の中に没してしまつた。其の頃十條姥ヶ橋で耕地え出かける途中の農夫が松の大木と見まちがつて跨いだ大丸太がむくむくと動き出して驚倒して視るとこれは大蛇であつた。當時里の人々は上野不忍池がだんだん狭くなつたので、辨財天の精靈なる大蛇が、此の池の上流の三寶寺池え居を移したのだと語り合つたという。

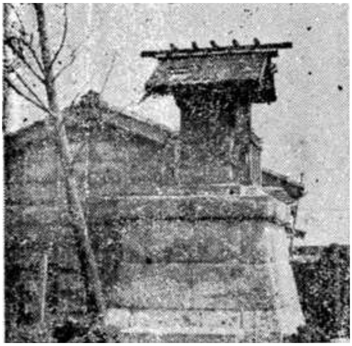
2　齋藤學校

明治の七八年頃には勿論公立の小學校なぞは無く、所在の學識者が寺小屋式の敎授を行つて居た。

當地では石神井川沿いの堀江清勝氏旧邸向いあたりに幕府の祐筆職を先祖とした齋藤国太郎氏が居住して初學の學童を薫陶した。主として堀船、瀧野川、豊島などの童幼が集まり盛んな時代には百六七十人にも達したことがあつた。敎授内容は四書五經といつたような初學者にはひどく難解な漢學であつたが、児童は懸命についていつたと云はれる。その後明治十年頃公立小學校の開設と共に自然廢校になつたが、大正初年長壽の国太郎翁が

米壽に達した時、多數の教え子たちが集まつて盛んな祝賀式が行はれ翁を慰めたという。以上は郷土の古老たちの談話である。

3 女体權現（駒塚）

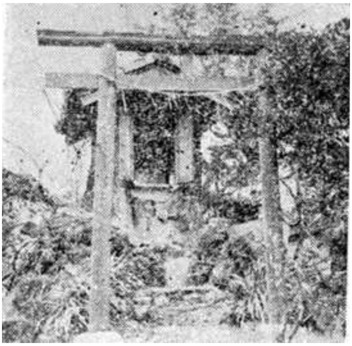


女 体 權 現

これは佐藤製衡所構内の荒川河岸にある小祠である。かつて三四本の樹の下に石碑と共に鎮まつて居たが、去る二十年四月の爆撃で跡方もなく四散してしまつた。現在では小田原の道了尊を祭つてあるようだ。此處は天文の昔、豊島清光の息清泰が馬術訓練中に狂奔した乗馬もろ共、河水中に陥没した場所と云はれ、其の英靈と乗馬の爲めの祠であると傳えられた。一体權現とは平安朝以來の両部一実神道から起つた信仰であつて、日本の神々を佛菩薩の化身と見る思想である。それにしても女体權現とは甚だしく奇異な神である。

恐らく觀音菩薩を眞意に潜めつゝ、日本化した辨才天女を奉祠したのであろう。この女神はもと印度のサラスワテイ河の神靈と信ぜられた女性神である。佛教の東漸と共に日本に傳來したが、従つて水に由縁ある神とされている。因みに此の祠の所在地の小字は女体と呼ばれる。

4 淺間淵



浅 間 神 社

現在の寶酒造會社對岸の宮城町側を淺間淵と呼んだ。對岸の河岸から約一丁程奥に淺間神社があつて大正末期までは数本の大木が鬱然と聳

えて居た。恰かも荒川の屈曲点の内側に在り、河水が梶原側へ突當つて反轉する空隙に自然生じた淀である。

淺間神社はその後宮城町村社に合祀されて移轉し、旧宮地は小高い畑地に變つている。最寄りの宮城町九七四に住む石井みち氏は旧淺間社にあつた杉の大木を社殿として、御神体を分祠して屋敷内に奉賛して居るが、近く此の一帯が汚水浄水場となるので此れ等の遺蹟は殞滅するであろう。

こゝには昔から豊島清光の娘足立姫の怨靈が水牛となつて棲んでいると信ぜられた。荒川が増水したときなぞ轟々たる瀬の音を聞いて梶原の村人は、足立姫の水牛が水を潜つて荒れまわると語り合つて怖れ戦いたという。淺間神社は富士の神靈木花咲耶姫を祭神とする。此の女性神が足立姫と結び付いて傳説を生じたことは極く自然である。

5　往昔の豊石橋一帯

豊石橋は明治二十四年橋脚を輪型に造營して俗に眼鏡橋と呼ばれ、其の後昭和三年に現在の鉄筋式に改修された。それ以前は粗末な土橋であつて何故か番太橋と呼ばれていた。享保の頃、夫婦の六部行者が善根積集のために架橋したと云う傳説があるが、或は夫れによつて此の俗名が生じたのだろうか。明治二十年以後でも此の橋の梶原側は腰巻稲荷の森が氣味悪く覆い被り、附近の水車小屋で臼を覗く肩に狢が飛びついたり、眞夜中に狢が民家の雨戸を叩くことなぞ屢々であつて、日暮れてからは人通りも稀だつたという。

6　梶原渡し

明治三十九年今の東洋紡績工場の前身下野紡績工場が現在地に建設され、宮城方面からの通勤者が増加して小台渡しを經由することは非常に不便だつたので、梶原側石井惣吉、宮城町側阿出川伊三郎両氏が部落代表となつて両地の住民賛同の上明治四十二年申請開設して今日に至つたのである。今だに櫓を押す大時代風な悠々たる渡船氣分を満喫できるのは微笑ましい限りである。とは云え此處に架橋して對岸五六百戸の宮城町との交通を便

にし、且つ両地の發展をはかる構想は二十數年來の要望である。いつの日かこの宿望を実現し度きものである。

7 彰義隊余聞

慶應三年夏、上野輪王寺公現法親王を戴いて官軍薩長兵と戰つて敗れた彰義隊兵士は、多く中仙道を經て板橋方向え敗走したが、一部は道灌山下を三河島、王子方面えも三々伍々離散した。之を追撃する官兵と入り乱れ、肩にした拔身の刀槍が陽にきらめいて田甫の向いに見え、竹山の奥に潜んだ里人の身邊には銃丸が跳彈となつて荒れ狂い、剰さえ道灌山の台地からは大砲を打ち込まれるなぞ、生きた心地なく聲をひそめていたという。此の時には某地の某は彰義隊士が他日を期して糞溜の中に隠匿した莫大な軍用金を拾得したとかしないとか、種々の風説は乱れ飛び、戰闘地域に近かつただけにまことに騒然たるものがあつたという。

8 埋　木

大正二年現在都電となつている舊王子電氣軌道敷設の頃、船方車庫の敷地を掘開したところ、地下數尺の深さから直徑二尺、長さ數間に及ぶ埋れ木が泥炭ようになつて發掘されたという。又中里の貝殻塚の附近では旱天のときなぞ地表が船形をして割れることがあって、古老はその下に船が埋没していることを察知したという。その外大きな枯木の稍が地上に露出して居たり、郷土一帯が陸地となつて餘り遠くないことを物語る遺物が多かつたらしい。これは田中榮吉翁の談話である。

9 王子電車の開通

三輪から王子驛前を經て赤羽、早稲田などに通ずる現在の都電は、昭和十七年二月一日交通局に買収されるまで、王子電氣軌道株式會社が業務を經營していた。發足當時の工事殊に當町區域内は明治四十三年起工し、大正二年三月になつて三輪

十二にすぎなかつたという。

其の後、山下から王子驛前を徑て飛烏山を連絡し、更に昭和四―五年に亘つて早稲田、赤羽まで延長して社運は隆盛に向い戰争激化と共に都交通局の傘下に吸牧されて此の社の歴史を閉じた。

そのかみ業務草創當時の十年近くは田畑の中を走る田舎電車であり、從つて乗客は寥々たるもので徑營者の困窮苦心は慘憺たるものがあつた。その窮境打開のため觀櫻期には飛烏山にその頃めづらしいイルミネーションを点じたり、納涼時節には螢を放つたりして乗客の吸牧に奔走したという。然し大正十年頃から、殊に仝十二年の大震災以後には沿線一帶の人口が急激に膨脹したゝめ社運は漸次向上した。現在でも荒川車庫には會社時代からの古參從業員が二十三四人も居り、古い乗客には親しまれているという、地方色のある都電となつている。

10　郷戸の長壽翁

堀船町一丁目八八八の郷戸區域には當町最高の長壽翁がある。藤代茂助氏と云つて萬延元年生れで當年取つて正に九十四歳に達している。祖母は八十九、母は八十八まで長生した豊壽の血統である。

先年埼玉縣鴻巣町に疎開中長壽者として今上陛下のお成りを奉迎申上げた節に、陛下は最長老の同翁の前で車より下り立たせられ親しく御慰問のお言葉を賜はつたそうである。これは同翁が老の眼をしばたきつゝ語る感激の第一話である。今だに視力、聽覺共に健全、殊に壮年を凌ぐ矍鑠振りと謂うべきである。近隣に住む七十四才翁の荘伊兵衛氏なぞは伜あつかいにされるという。かゝりつけの醫師は九十六才までの壽命を保證しているというから愉快なはなしである。

11　水害雑景

當町は荒川の岸にあり而も低湿地であるため永い間水害に苦しんだ。農村時代にも屢次の出水に米作を流失することが度重なり、被害の傷痍が恢復しないうちに更に災害を被ると云う状態であつた。これによる疲弊のためか、明治四十年前後に於ても盲縞の長絆纏にモジリ外套という姿態は、少々あらたまつた外出着であつた程倹ましい日常であつた。當時二重廻しや洋外套を着用する者は新與の會社に勤務する人たちだけだつたという。

最近になつてからも明治四十三年、大正二年、仝六年、仝九年の各水害の外に小さい出水に至つては枚擧に暇なきほどであつた。特に明治四十三年の大洪水には梶原の最高地点の福性寺も濁流が本堂の床に達したという。三部落中では梶原が最も頻繁に水害に襲はれ、郷戸、船方の人たちは梶原は蟹が泡を吹いても水が出るとか或は梶原人を水冠りなぞと戯れて呼んだ。その後大正十二年荒川放水路が完成するに及んで郷土一帯は全く水害より解放された。

12　雷神と落雷

白山神社の東側には昔から天祖神社、日枝神社なぞと並んで雷神を祭祠し、これを五社大神として崇拝した。この爲め當地には曾つて落雷がないと云はれ、事実一回もこの事故はなかつた。その後明治三十二年頃になつて、當時現後藤半七氏宅の地に水車業を營んで居た石井清次郎氏が夏季の涸水期に業務に差支えを生ずるところからその頃の動力の花形であつた蒸汽機関設置を計画し、故堀江榮太郎氏なぞと共に發企し株式會社組織を完了して、梶原に初めて高い煙突から煙を吐く近代工場が出現した。當時の郷土人は、煙を吐き轟音を發する株式會社工場の出現に驚異の日を瞠つたらしい。ところが或る大雷雨の日に此の煙突に避雷装置がなかつたゝめに堀之内地區に前代未聞の落雷の椿事が勃發し、工場では怪我人を出す騒ぎだつた。郷土の男女はあんな煙突を樹てたので雷神の怒りにふれたのだと恐れたという。此の雷神は白山神社本殿東に今も五社神社として祭つてある。

六、郷土の生んだ文化

堀船は地域狹く且つは文化的に概して水準が低いと云はれていたが、実は現代文化への貢献は尠くない。殊に此の小區域から二つの工業上の發明が發祥したことはまことに偉觀とすべきである。その一は寫眞植字機の發明と他は燃焼機関のそれである。これは向上を希つて止まない科學の頂点に於ける夢と、これを追求する不惜身命の強烈な意志の所産であつて、これを遂行した求道者たちに崇高な畏敬を捧ぐべきである。戰後復興の目標を文化立国に目指す日本の進路はこゝに示されている。これら先覺者の遂げた偉業は青少年層の胸臆に絶えず希望の灯を点ずると共に、未開の分野えの勇往を鞭達するであろう。

1　寫眞植字機の發明

石井茂吉　氏

西紀十五世紀の中葉に獨逸で金屬活字母による活版印刷が發明されて以來、人類の意志思想の發表傳達は非常に便利になつて近代文明を生む推進力となつたと云はれるが、近代に及んでは更に高い能率と簡易な操作が要請されるようになつて、科學の頂点に立つ一群の新進たちの間には無限の夢が展開した。同時に寫眞技術の發達は是等の科學者の注目するところとなつて遂に寫眞植字機の發明となつた。これは大まかに云えば寫眞乾板上の字母を所望のまゝに光線によつて紙版上に植字するものであつて、從來の活字組版に比較して先づ鉛の活字が不要になつたことは勿論、一個の字母から大小希望のまゝに植字し、鉛毒の恐れも無く更に工場施設量が少なくてすむという等々の点に於て正に印刷技術界に現はれた驚異の革命児であつた。此の結果辞典のような精密鮮明を要する印刷ははじめて會心の成果を擧げるに至つた。此の發明は昭和十八年迄堀船町一ノ五一六に研究所を持つて居た當地舊家出身である工學士石井茂吉氏が昭和二年

略々完成されたものである。其の後昭和六年には恩賜賞金、仝十四年には東日大毎の第一回印刷賞など、前後四回の光榮に輝いた不朽の業蹟であつて、本年四月には宮中にて藍綬褒章を拝受された。

2　完全燃焼機の發明

古代の人類は自然發火の魔力的暴威を見て深く驚異したが、やがてこれを自家薬籠中のものとして自ら火を起すことに成功し、生活資具え火の加工を與えて日常生活を豊かにした。而も猶ほ火は眼に見えつゝ手に掴み得ない、譬えば陽炎のようなものである。人間の持つあらゆる創意を以てしても燃料から直ちに所望の熱度と量の火焔を起すことは至難であり、まことに意志を超越した變幻極り無い存在である。現代の文明社會に於てさえ僻地のうす暗い土窯の前に跼む主婦も、蒸汽機関の前にスコップを揮う火夫も今だに扱い兼ねている難物である。

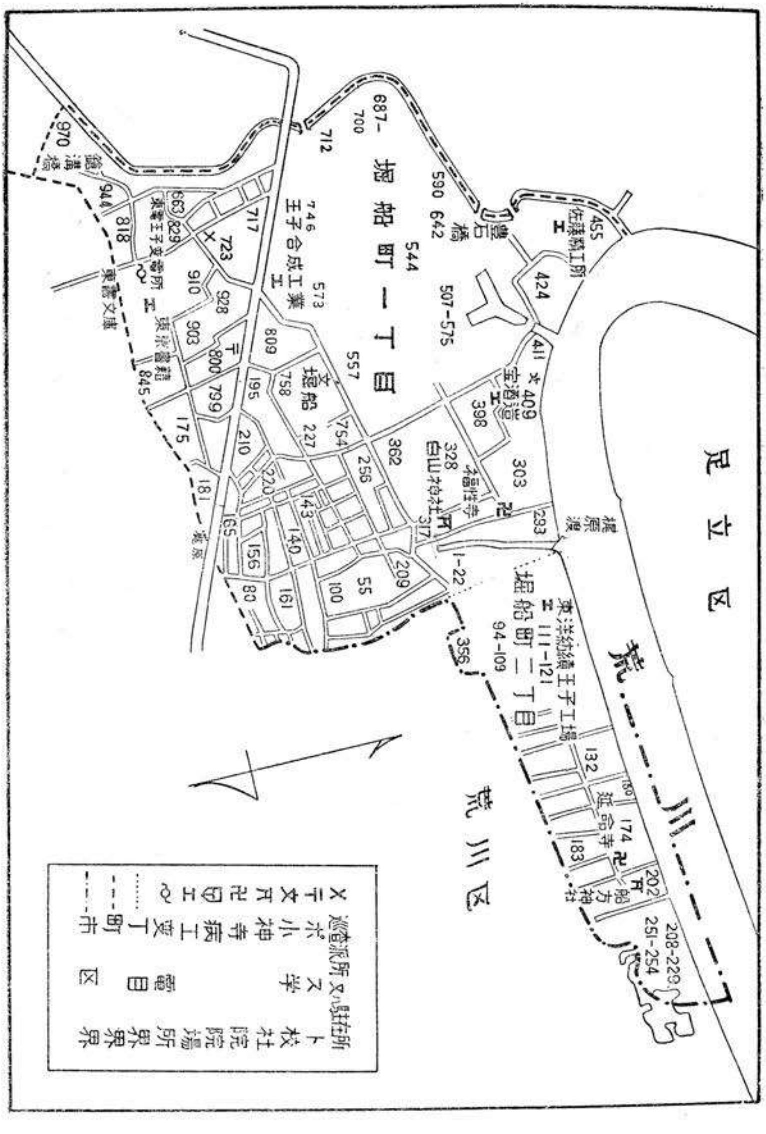
火食に初まつた人類の火の利用は現代文明に到達しながらも、更に明日の文化を生む爲めに如何にして強い火を創造するかは大きな工業界の宿題となつて來た。加之燃料資源の節約と、粗悪燃料の活用という工業日本の宿命的な條件を充足する篤めにも、創意の燃焼機構が鋭意探求されるようになつたが、此の研究は遂に半前爐式完全燃焼装置として結實した。

水越勇次郎 氏

これは多年の經験と獨自の機構から完成したものであつて、低品位炭をも完全燃焼させ特殊な構造によつて熱量を極度に利用して燃料の節約と火力の高揚に至大の貢献を遂げたのである。

本發明は堀船町一ノ一八一に工場を經營する水越勇次郎氏が海員時代の揺籃期の構想に多年刻苦の改良実験を加えて昭和十三年に略完成し廿四年専賣特許を得られたものである。降つて去る昭和廿五年四月には此の功勞によつて今上陛下に拝謁し藍綬褒章を拝受するの光榮に輝いた不滅の業蹟である。

（完）



足立区
荒川
荒川区
堀船町一丁目
堀船町二丁目
王子合成工業
佐藤精工所
豊石橋
宝酒造
東洋紡績王子工場
白山神社
福性寺
延命寺
東京書籍
東書文庫
巡査派出所又は駐在所
ポスト
小学校
神社
寺院
病院
工場
変電所
丁目界
町界
市区界

堀船町一、二丁目居住者名簿

一丁目二三番地
大竹　茂
水野　昭
一丁目二五番地
中村時壽
佐藤兵衞
小池吉衞門
橋本勝利
橋本方　中島　武
磯部武男
橋本完治
橋本完治方　津田かつ
關口勝之助
田島藤三郎
田島四郎
田島方　宇津木武夫
伊藤勝藏
松橋　要

菊地正二
田中久江
一丁目三三番地
大星忠治郎
大星方　細山三良
天野福三
高橋秀次
松本末吉
高橋方　大塚次郎
細金　弘
植竹のぶ
植竹　汀
植竹信一
一丁目三五番地
宇佐見友男
高橋晃夫
梅澤　昇

一丁目三七番地
加藤　清
多賀昭司
大塚益藏
多賀きぬ
長島保夫
渡邊竹一
大瀧敬藏
佐藤吉次
佐藤方　小林智雄
木下　武
小幡一郎
大島久清
大島方　染野晴雄
櫻井晨二
一丁目三八番地
佐藤兵太郎
佐藤方　佐藤賢治

鏑木四五郎
鏑木方　鈴木佐喜藏
佐藤富太郎
一丁目三九番地
千葉三郎
一丁目四二番地
古山和惣
堀越政雄
水野新治
水野方　金小出
〃　清水つね
〃　趙乙石
川浦仙吉
一丁目四五番地
湯川清一
友光きん
友光方　須藤福松
長嶋吉三
長嶋方　佐々木さくよ

一丁目五〇番地
安樂善光
久保田七郎
津吹初太郎
秋葉清
秋葉方　多賀利三郎
鈴木忠男
立原餘一
矢部信次
矢部方　八子彌藤治
高野光榮
野本新助
森田勝行
西川義清
石田友三郎
岡梅吉
薄葉嘉廣
北澤重雄
一丁目五三番地
小松米松

小泉信明
小泉壽男
三宅良治
一丁目五五番地
佐藤永作
牛田愛之助
早間佐吉
金子幸太郎
大石度
片桐恒慶
高橋登代治
石野信次
高橋方　宮坂光治
岡田清作
一丁目五九番地
山川富之
岡野松造
梶山菊次
齋藤丈吉
成田不二三郎

一丁目六〇番地
石川廣次郎
石川方　井田文太郎
〃　渡邊正雄
濱野政勝
出谷方　細川孫治
高野一
出谷重夫
寺田光惠
村榮郁夫
一丁目六四番地
田口和江
山岸七郎
熊坂源治
加瀬政吉
春木歛子
森十次郎
高橋鐵雄
須田彥一郎

一丁目六五番地
川名忠藏
白木守
一丁目六九番地
吉田清
江原政市
一丁目七〇番地
木村政志
鈴木周造
佐藤泰次郎
久保木倖司
小島則義
大野一司
草野廣治
一丁目七三番地
有本春吉
増田武
石田孝四郎
山出正吉
靑山政行

石川尙任
島田隆雄
五島登
山出方　菱田一夫
中村代三
一丁目七四番地
井口浩輔
井口方　樋谷文男
大場英男
平野忍
佐藤忠夫
一丁目七九番地
川木正治
淸川義幸
脇野正治
郷眞
蓬田キセ
花形喜代治
岡野朝次
桂田多傳子

一丁目八〇番地

樋口秀夫
樋口清隆
林森之助
市川鹿之助
市川茂平次
吉田登
根本昇
三浦義美
小柳テル
高橋信次
渡邊喜久三
小林よね

一丁目八一番地

佐藤伊三郎
飯村定男

一丁目八八番地

二葉庄藏
渡邊進平
加藤信一

一丁目九三番地

高橋德太郎
大森晴一
永井直行
松葉孝次
阿部勇太郎
塚田勝三郎
海老原孝三
吉澤マキ
松坂賢二
高橋一助
中野忠次郎
岩井正五郎
岩井方 石塚四郎
〃 岩間保之
岡本豊富
石井幸三郎
關町俊也

一丁目九四番地

青木一作
秋葉榮藏

一丁目九五番地

鹿田定

一丁目九六番地

千葉襄治
舘野一二三
今井正一郎

一丁目九九番地

堀田ハマ

一丁目一〇〇番地

沼田さだ
藤田七之助
石井英四郎
齋藤勝美
田中米造

一丁目一〇一番地

手塚忠夫
堀彦一
松浦康彦

一丁目一〇二番地
秋葉榮一
秋葉方　大宮孝一
〃　田村文男
一丁目一〇六番地
渡邊いち
石井勝次郎
下川龜吉
一丁目一〇七番地
齋藤四郎吉
田中保
佐々木金造
栗原信次
鹽原實
加藤すゑの
中澤隆義
中澤方　松本光一
中島初治
高橋富雄
田畑龜藏

一丁目一〇九番地
小金井春吉
小金井方　鈴木四郎
一丁目一一〇番地
加藤邦彥
町田吉次郎
山口岩吉
岩倉松吉
山口磯治
岩下コウ
一丁目一一二番地
長谷川スヱ
笹崎貞
笹崎方　石山友吉
〃　小林良典
力丸四志
下川岩吉
武類忠治
小貫靖隆
宮本龍太郎

宮本方　加藤藤吉
佐々木康子
影山留吉
笹崎朝義
杉田四郎
堀越良典
大池幸一
大池方　高橋啓一郎
一丁目一一三番地
北澤こう
一丁目一一四番地
鈴木清司
鈴木方　野澤正義
櫛田春良
一丁目一一五番地
鵜澤耕一
一丁目一一七番地
板井清
野浦久二

一丁目一一九番地
島田實
茂木高一
茂木方
柳澤賢一
金子くめ
鈴木政男
荒井善吉
一丁目一二〇番地
齋藤喜市
和田義晴
藤井京子
桑野道久
小森義三郎
福原秀吉
福原方
土屋貞臣
大野靜江
安藤隆之助
岩田武
佐藤ふみ子

一丁目一二五番地
櫻井平吉
江川榮之助
瀧澤繁夫
江川方
石垣カネ子
小林酉藏
一丁目一二六番地
岡本功司
小室末治
一丁目一二七番地
村田嫌二
吉田辰夫
重田カクシ
直道クラ
一丁目一二八番地
高野忠一
長島隆明
一丁目一二九番地
津田良雄
木口武夫

田山次郎
岡本潔
篠原フサ
高木正之
竹前富士夫
佐藤懲哉
金谷眞子
佐藤方
佐藤平三
金子兵平
大野直次郎
小泉春子
白岩敬次郎
海老原博美
早崎金藏
須藤與吉
板倉重美
清水行雄
佐藤利夫
田地野正三郎
倉石數知

佐藤方　本間倉吉
北村良忠
川島榮次郎
鈴木清
三森仲造
一丁目一三〇番地
石井邦之助
石井方　本間梅吉
高澤又五郎
一丁目一三一番地
伊藤孝
蒔田公一
渡邊康藏
渡邊方　手塚謙次郎
宮崎傳吉
渡邊方　菊川トヨ
一丁目一三三番地
高山秋三
細井しず
石渡庄次

今屋源一
豊田喜惣次
佐藤義太郎
小宮山嘉藤
佐藤重春
勝亦義行
小宮山方　小林きぬ
安田英男
一丁目一三四番地
梅原洋一
瀬頭末
瀬頭方　吉田繁夫
鈴村誠
根岸一美
一丁目一三七番地
五味とみ
坂井源之丈
山本剛三
柏原光雄
豊田稔

豊田方　金坂的
野本謙治
柏原一
飯沼政夫
室橋勝治
高際寛
小林理藤治
坂井源吾
内田祐司
内田方　吉田惣作
關根孝治
一丁目一三九番地
稲川保
勝又武雄
青木初太郎
常田稔
深具正藏
萱野俊彦
一丁目一四〇番地
高柳亮一

新谷　堯

一丁目一四一番地

白木　功

森田　津る子

野尻　庄次郎

白木　明

一丁目一四二番地

永井　興吉

永井方　黒田　春子

〃　廣瀬　良平

一丁目一四六番地

砂岡　富美枝

向山　民次郎

一丁目一四七番地

梅田　悌郎

一丁目一四八番地

桝田屋　園枝

桝田屋方　菅沼　ノブ子

北島　秀雄

畑中　孝造

田口　平吉

市川　三郎治

一丁目一四九番地

百瀬　ナカ

百瀬方　木内　茂

黒澤　孝治郎

一丁目一五〇番地

引馬　清

永井　初枝

小林　鈴江

宍戸　忠夫

諸川　守

大段　要之助

白木　馬之助

檜山　義龍

檜山方　大内　敏藏

五味　春彦

榎本　ミヨ子

一丁目一五一番地

和田　禮子

山家　久子

相澤　正平

吉田　義榮

長谷川　一

岩崎　セン

岩崎方　熊野　勇喜雄

〃　河端　やす

〃　猿橋　立男

樋口　安次郎

小橋　正吉

小橋　榮一

天野　房江

天野方　菊地　一虎

安彦　次郎吉

安彦　熏太郎

關　武雄

北川　久治郎

龜廣　茂

龜廣方　加藤　幸正

渡邊　幸七

一丁目一五七番地
中川重十郎
野島龜太郎
野島方　金井泉
望月武

一丁目一五八番地
初見正德
松岡市藏
佐藤喜代子
吉池吉榮
永廣力
尾崎誠一
篠田甚五郎
榎本盛太郎
淺井幹久
濱野濱吉
牧田平次郎
榎本方　大木多美男

一丁目一五九番地
中島庄治

船見茂之
武村重三
石川賢司
荒川安信

一丁目一六〇番地
赤羽根喜市
今野哲
永井勇二
新井善次
久保仲次郎
久保方　松澤都子
〃　小泉一男
安原一男
森興作

一丁目一六一番地
文屋重
小田桐隆
荒井千代松
瀬川兵吉

一丁目一六二番地
中澤友義
中澤方　中澤きよ子
白田秀一
白田方　吉本文雄
平井三男
和田武志
竹内一義
篠田武夫

一丁目一六四番地
小宮正俊
佐藤すみ

一丁目一六六番地
菊地賢三
原武雄

一丁目一七一番地
小林眞二

一丁目一七三番地
菊地奥藏
菊地方　富田正樹

一丁目一七五番地

江原己吉

一丁目一七六番地

坂元富太郎

印刷寮

鈴木武一郎

一丁目一七八番地

阿部嘉男

柳澤義知

清川重一

成瀬聖一

平賀清光

中村敬太郎

平賀方

平賀武

平賀勇

鈴木正三

伊藤榮助

鈴木勇

一丁目一七九番地

佐山久雄

一丁目一八一番地

飯田トク

飯田方

増永清三郎

水越勇次郎

一丁目一八二番地

酒井勝次郎

岡安榮二

木村哲郎

渡部貞次

川浦武平

山本清司

一丁目一八四番地

齋藤龜壽

阿部千代

草野宗

鈴木みわ

中村方

中村喜代見

清水靜江

武田政男

高橋要治

平岡清司

一丁目一八五番地

稲葉利夫

一丁目一八六番地

吉田作次

吉田十四三

一丁目一八九番地

高松末吉

一丁目一九〇番地

吉田富藏

畑野一郎

渡邊福一郎

一丁目一九四番地

高野雄三郎

一丁目一九五番地

舟山長藏

相原進一

小日向寛

齋藤清

駒宮留吉

一丁目一九九番地
小林　安治
佐藤　慶一
西郷　昇一
手島　高四郎
堂　キミ子
荒川　貞之助
吉澤　喜次郎

一丁目二〇一番地
小山　リキ
小淵　正弘
高木　良造
鈴木　榮治郎

一丁目二〇二番地
北村　久松
荒川　荘三郎

一丁目二〇四番地
岩田　ユキ

一丁目二〇五番地
藤澤　榮吉

關口　龜雄

一丁目二〇六番地
今井　百合子

一丁目二〇七番地
水落　寅藏
篠山　みわ
市川　保三
稲葉　芳次郎
市川方　名取　宣孝
目黒　盛松
犬塚　信夫

一丁目二〇八番地
飯島　湾司
川崎　定夫
川崎方　渡邊　實
金子　正五郎
金子　三藏
鈴木　岩吉
海江田　明

一丁目二〇九番地
河西　源介

一丁目二一一番地
佐藤　久
上田　平次郎
西川　源吉
菊田　勇
片山　壽
山上　みち
山上方　坂田　永治

一丁目二一二番地
武藤　粂三郎

一丁目二一四番地
谷口　昭次
鈴木　次郎吉

一丁目二一五番地
成田　政治
横山　露一
小野　富子
片岡　豊二

藤井定吉
藤井方　若林吉夫
〃　大野清次
〃　黒澤藤吉
〃　醍醐照明
添田末吉
添田方　小沼源七
後藤勝秀
梶田久行

一丁目二一六番地
高橋力
山下義雄
深澤純衞
北長門
山下喜代
北みつ子

一丁目二一七番地
百瀬盛登
島根照
鹽野谷一郎

川野充
松縄直吉
淺利英一郎
鹽田ハナ

一丁目二一八番地
馬場正雄
銀川重治
神林國平
神林孝嘉

一丁目二二〇番地
吉坂一男
向井廣吉
常木清吉
生川秀雄
生川方　清水五三郎
稲毛甲治
佐治延秋
佐治方　鯨井フヨ
小林仙藏
渡邊貞吉

一丁目二二二番地
大野作次郎

一丁目二二三番地
齋藤長太郎
中川午次郎

一丁目二二四番地
齋藤勳

一丁目二二六番地
小林哲次郎

一丁目二二七番地
前田武太郎

一丁目二二八番地
鳥居良信
武田利雄
渡井ひさ子
遠藤遠次

一丁目二三〇番地
服部酉藏
相笠信吉
加納友治

中島喜吉
田尻直江
伊藤茂一
佐々木國松
五淵興市

一丁目二三四番地
鈴木壽郎
石川きみ

一丁目二三六番地
戸室義一郎
須藤禮作
出雲養太郎

一丁目二三七番地
小熊清作
小熊信一

一丁目二三九番地
清水孝三
遠山孝雄
大嶽きく
柿沼正勝
大嶽方

三輪文彌
富澤キク
加藤讓
淺見市五郎
梅木誠一
荻野フシノ
小野クニ
山口平次郎

一丁目二四六番地
小原ゆき
高橋平三
豊田仁造
豊田方
柳輝義
大比賀正太郎
田中博
長田守弘

一丁目二四七番地
伊藤藤太郎
永井三男
中根平之助
永井方

一丁目二四八番地
齋藤幸三郎
持田忠保
風見新六

一丁目二四九番地
上浦武男
田巻熊助
菅野正信

一丁目二五〇番地
玉野淑子
近藤トキ
近藤方
越前谷アイ子
高野満
横倉大一郎
上山弘
青木乙松
赤川順一

一丁目二五一番地
畑岡ちか
澁谷和子

澁谷寛二
井川照子
井川方　柴田とき
菅生貞仁
菅生方　峯村タケ
長谷川松太郎
長谷川方　大里順也
〃　山口恒雄
瀧田得壽
住義雄
増田ハツ
増田方　奈良繁雄
平沼善雄
上島一雄
天田雪江

一丁目二五八番地
熊谷彙太郎
小澤すい
高松光義
安井勝治郎

秋元錄太郎
吉野正巳

一丁目二六〇番地
山本國男
諏訪山サク
横澤熊次
杉山武助
竹内新太郎
田村順休
田村方　堀江友吉
丸山正仁
猪俣満
諏訪山一郎

一丁目二六七番地
井桁理助
松村好藏
石井與五郎
田崎シチ

一丁目二六八番地
市村榮治

一丁目二七一番地
楠勇
横田惣吉
横田方　天沼雪江
伊藤篤
野澤辰造
小田桐すわ
中島一郎
中島金之輔
木村義正
松島元信

一丁目二七六番地
吉澤義太郎

一丁目二八五番地
田久保周譽

一丁目二九七番地
諏訪志づ

一丁目三〇三番地
大東燃料　手塚與平
林政治

大東燃料　佐藤暹
小野澤辰五郎
野城才治
竹田勝彥
大東燃料　鹽浦泉一
〃　山岸里司
〃　鷗軍治
一丁目三一二番地　鈴木正男
一丁目三一六番地　荒川正美
竹堤花子
山本キヌ
庄司健次郎
華山キヨ子
新海もと代
佐藤万千之助
荒川庄八
大竹和子
眞瀬英雄

深田五兵衞
竹田治康
柴崎寛幸
一丁目三一七番地
二見方　隅内清
北井方　椿勝四郎
〃　本橋孝
佐藤方　庄司健藏
吉川末衞男
石井銀衞門
石井銀衛門方　石井清次
〃　石井サヘ
三浦子之助
佐藤マツ
二見春雄
二見方　小曾根セン
北井清太郎
一丁目三二〇番地
山田文雄
森川直造

石島榮太郎
龜瀧靜子
田口包次郎
白井誠一
田中喜久雄
龜瀧穗之助
井上正一
井上善八
湯澤惣吉
佐藤ヨシ
小林木一郎方　片庭長治
一丁目三二八番地
柳澤茂二
石井銀次郎
一丁目三三〇番地
小泉忠次郎
小泉彥七
一丁目三三七番地
新井庄吾
今田方　石川齊一

今田方　研石留藏
今田泰次郎
今田方　石坂則保
渡邉由次郎
立木秋藏
一丁目三三八番地
長田美喜男
荒井清治
一丁目三四二番地
安藤龜市
一丁目三四六番地
澤栗吾郎
秋元由藏
秋元方　小林靜夫
〃　北島春雄
〃　志田春江
一丁目三四九番地
小林精一郎
堀口米作
河根春治

水野政一
一丁目三五〇番地
安藤正夫
安藤方　小林勝治
江森松次郎
若林孝次郎
水越晋一郎
飯塚利一郎
內山勇藏
一丁目三六二番地
小林をかつ
小林木一郎
野田高光
野田高光方　野田友三
後藤浩
荒川正一
岡田眞市
西村武子
佐藤寅藏
奈良毅

佐藤タキ
佐藤方　上野三代之助
〃　屋照代
〃　猪岐まさ
〃　瀧澤尚男
內田龜太郎
荒川正一方　塚越敏理
野政一
折原均一
竹內平太郎
松田豊春
大平文吉
伊澤宗一
一丁目三六四番地
沼崎太吉
小森はる
荒川住夫
荒川方　大久保あい子
一丁目三七〇番地
池田桃右衛門

一丁目三七二番地
鈴木喜三郎
坂上保
一丁目三七三番地
榮清市
石田與八
渡邊福三郎
赤羽根武
宮本常男
一丁目三七四番地
小泉廣吉
須貝善吉
小林初造
寶酒造社宅 高里良英
白石佐平
川田好
赤松文平
一丁目三九二番地
岩田久仁治
岩田方 町田弘秀

清水建設作業所
三俣金次
湯田安雄
鈴木信吉
一丁目四〇一番地
嵯峨治
三原満
三原満方 三佐和ツネ
一丁目四一〇番地
鎌山久好
後藤半七
一丁目四一一番地
關三子雄
今井喜久次
高橋明
一丁目四二六番地
龜山庫治
繁野文二
佐藤製衡所 吉村孟
鹽島繁次

柴崎廣治
佐藤製衡所 遠藤芳夫
〃 白樂喜三郎
關口芳夫
藤田辰男
佐藤方 古川三二
〃 井出喜久次
〃 木滑長松
〃 齋藤明
齋藤一
野本運司
一丁目四五一番地
坂木昇
坂本方 堀口三造
〃 成田元安
一丁目四五二番地
坂本方 瀧村明夫
瀧村明夫方 瀧村保登
瀧村義章
市川只男

小林武夫
坂本虎男
竹内作次郎
坂本敏治
坂本彌
坂本彌方 坂本力雄
坂本鍛工所 高澤定雄
一丁目四五五番地
都營住宅一号 内山正己
〃二号 飛田喜三郎
〃三号 荻原唯成
〃四号 房野竹一
〃五号 淺井金藏
〃六号 澤崎武次
〃七号 青野清
〃八号 村上義惠
〃九号 佐藤靜子
〃一〇号 生井良三
〃一一号 三井袈裟四
〃一二号 石塚政一

〃一三号 木下初太郎
〃一四号 長谷川讓
〃一五号 眞田良太郎
〃一六号 古田正雄
〃一七号 森川祐治
〃一八号 鈴木義次
〃一九号 柴崎暢
〃二〇号 永澤清
〃二一号 關矢哲司
〃二二号 茅原香代
〃茅原榮方 梅原毅司
〃二三号 小林喜太郎
〃小林方 土屋義雄
〃二四号 山本純民
〃二五号 磯田清
〃二六号 熊田茂雄
〃二七号 辻本芳雄
〃二八号 松本訊
〃二九号 辻與三郎

一丁目四六三番地
問矢方 問矢新市
問矢茂子
加藤林造
一丁目五一六番地
都營住宅三号 松尾こと
〃松尾方 逆井任治
〃三三号 谷川亘
〃三四号 大和田重治
〃三五号 内山貞子
〃三六号 川村正三郎
〃三七号 小林宗一
〃三八号 柴崎重平
〃三〇号 金子敏克
〃金子敏克方 金子雅夫
〃都營住宅 松下喜太郎
一丁目五一二番地
伊勢作藏
一丁目五二九番地
岩佐永雄

谷口忠義
谷口方　谷口昇
一丁目五四八番地
天野梅壽
増田政次
齋藤みよ方　齋藤隆次
仙石敏男
小林丈助
山崎隆
杉田三四郎
齋藤みよ
野本清次郎
福田善二
佐々木勇太郎
田中寅吉
加藤吉三郎
石井恒
深瀬正一
澁谷一郎
赤間義治

上野國藏
安田喜一
一丁目五七五番地
望月信雄
山田金逸
一丁目五八二番地
馬場悦子
大堀久雄
荒川サダ
荒川方　清水八惠子
〃　若杉利子
品田方　鷲田次男
一丁目五八三番地
高松ふじ
一丁目五八四番地
關つね子
一丁目五八五番地
原田智一
村田保雄
高松方　古口セイ

遠藤あさ
關武
白井靖子
熱田安之助
遠藤養治
土信田通治
齋藤イネ
齋藤方　福原宏
一丁目五八八番地
菅原多子
棚部庄八郎
杉山新平
長山濱
柳田利雄
田中登喜夫
杉山善雄
陣内力
一丁目五九〇番地
矢內廣衞

一丁目五九一番地
宇田川國三郎
山田清八
一丁目六〇九番地
酒井クメノ
飯面誠一
高山二男
一丁目六二二番地
小林好一
一丁目六二三番地
印刷廳寮 松村良行
〃 上田武男
〃 海谷二朗
〃 石田正美
猪瀬幸作
大井鍵三
横山章三
大塚保治
櫻井粂雄
白田三三郎

水野弘之
新部助次郎
井上福次郎
印刷廳寮 石橋羲策
菊地信郎
堀井芳雄
細淵龍吉
伊藤秀夫
三宅春造
小野勇吉
柳田吉松
富田新一
本多正人
南口重幸
篠崎俊男
鈴木長吉
恩田武衞
久保田清一郎
高田英次郎
印刷廳寮 桑原梅子

印刷廳寮 桑原伸枝
〃 澤田喜一
池田實
蠣崎肇
本多正智
小泉文代
佐藤留藏
片桐勳
一丁目六四二番地
東京鑄造社宅 金子正隆
天野安敏
竹内德三郎
山田外之
唐澤猛
糸村昌明
田中きみゑ
竹田和夫
日本專賣公社機械製作所 平澤德
奥野友之

山本定夫
野村勲
樋口玉藏
高橋幸次郎
新開哲明
昭和アルミ寮　小山昭二郎
一丁目六五七番地
新倉富藏
堀口健吉
一丁目六五八番地
保坂昌暄
土江猪義
一丁目六五九番地
佐野久二
原田方　松本宗吉
一丁目六六〇番地
目黒知良
目黒方　小熊力男
井出澄人
栗城五六

一丁目六六二番地
鈴木善雄
一丁目六六三番地
石井秀三
一丁目六六四番地
西井時次郎
及川哲志
及川方　高橋静
及川節男
小澤正
清水方　清水金作
澤部春雄
澤部方　民谷千枝
玉田彰作
小椋正記
山下巖男
山田一男
一丁目六六六番地
小川一雄

一丁目六六七番地
堀江勤
一丁目六六八番地
岡本馨
佐藤方　佐藤乙四郎
奥山常春
鈴木毅
増島富士子
石崎政家
金子榮治
乃一博美
須永方　須永高次
須永忠次
伊藤伊治
加賀谷節
加賀谷源次郎
梅谷幾三郎
桑原毅
永井錬一郎
關口清司

關口方　關口操
內藤菊二
石井榮一
青木賢二
佐藤吉治
一丁目六七二番地
堀江重三郎
一丁目六七四番地
榊榮三郎
石田清
一丁目六七七番地
玉田勇
杉山俊孟
杉山方　染谷満
飯塚盛次
飯塚實
田中勇
鈴木誠進
鈴木誠進方　關又三郎
綠川實

一丁目六七八番地
松本松次
戸川方　田村數磨
齋藤八郎
前田安正
高橋金一郎
高橋方　染谷吉一
本間秀雄
大瀧武仁夫
淺子源造
淺子方　片柳貞男
櫛田德治
戸川正雄
前川政次
梅原順藏
一丁目六八二番地
中村志夫
一丁目六八四番地
福井安一郎
第二製パン所鈴木敬一

一丁目六九〇番地
木澤さだ子
矢島唯雄
一丁目七〇六番地
天野信吉
白井初太郎
山根義孝
中村馬五郎
山根伊三吉
芝浦工業工場內
鹽澤勝士
一丁目七〇七番地
深澤皓
星三重
一丁目七〇九番地
石井禮壽
大川正一
畑山粂松
一丁目七一七番地
岩間政雄

木脇信
小宮孝茂
池野捨次郎
橋場利雄
一丁目七二一番地
河合重次郎
一丁目七二二番地
田淵方　吉川鶴子
横尾方　二川敏治
折原藤次郎
田淵利助
大西松次郎
鈴木榮治
篠崎寛
伊藤市郎
飯塚昌二
石井孝三郎
園田康治
横尾忠二
横尾方　大塚幸雄

石井清治
角井録雄
小泉流正
一丁目七二三番地
本田たき子
堀江寛
高島ミツ
野田勇
藤本登作
宇佐見信吉
脇せつ
脇方　長博
一丁目七二六番地
大島大三郎
五十嵐進
一丁目七二七番地
富永昌夫
富永方　岡澤隆一
一丁目七二九番地
神宮啓治

一丁目七三七番地
遠藤勇次郎
遠藤方　田中義良
内田辰夫
村石武男
野口方　高野勇次郎
一丁目七三八番地
小原次郎
山上竹次郎
齋藤庄吉
荻野長作
荻野方　五十嵐美作
加藤君江
長谷川方　新里時次郎
田中カネ
佐藤欽一郎
手島丑藏
秋谷彦三
勝山喜太郎
堀江市郎

佐竹只吉
齋藤隆之
槇　澄雄
白井清治
石井キク
鹿島治作
渡邊善二郎
高橋兼吉
額　浩
一丁目七四〇番地
清水龜太郎
一丁目七四一番地
阿部太市
高木秀二
一丁目七五〇番地
榎本喜平
一丁目七五五番地
龜井丑一
元地富治
田口金造

一丁目七六〇番地
室井　清
松橋直吉
松橋鐵郎
奥山泰五郎
菅原松壽
原　仙太郎
内田雅章
原　武雄
石井弘一
大塚松太郎
海沼佐次郎
海沼方
倉本健治
一丁目七六八番地
林　ちよ
平野信二
森川信一
杉山すみ江
五十嵐幸吉
橋本源吉

坂　三千三
一丁目七八五番地
長谷川四郎
牛川正一
川崎新介
一丁目七九八番地
三浦次雄
一丁目七九九番地
今井壽太郎
岩田きよ
石川章太郎
一丁目八〇〇番地
文屋佐太郎
文屋方
島田庄太郎
日本繋泉
大森德一
〃
内藤三次
〃
富澤金藏
倅山定一
一丁目八〇六番地
橋爪正儀

那須榮助
戸田宗一
鈴木謙次
泰樂唐男
里見とら
龜田榮吉
熊倉代三郎

一丁目八一五番地
印出輝子
野崎友俊
金子源太郎
荒川豊吉

一丁目八二三番地
東書寮　渡邊昭三
〃　山口シズ
〃　小金井道夫
小金井方　栗本正勝
加藤朝雄
島田元吉
東書寮　見富肇

栗本清
石川虎雄
川上太一
白倉一也

一丁目八二八番地
岡崎俊
飯久保榮一
大島宗太郎
石津政藏
信田松太郎
梅澤宏

一丁目八三一番地
高橋茂雄

一丁目八三七番地
須藤賢一
田木彌治郎
廣岡政吉
廣岡方　廣岡幸治
今野勇
早川曉

齋藤清
飯塚時三郎
井上孝吉
篠塚春藏
榎戸愛子

一丁目八五二番地
品田德太郎

一丁目八五八番地
木下一雄

一丁目八七〇番地
田中作馬
川島保治
半田貞三郎

一丁目八七八番地
五十嵐茂
澤田利藏
平山義範

一丁目八八七番地
明石保太郎
西村義雄

一丁目八八八番地
板橋常藏
飯塚佐平次
藤白金太郎
市川薫
一丁目八九〇番地
川上末次
鈴木勝泰
長谷川斜
磯田陽
横井川富藏
東書寮 渡邊俊夫
福山伸治
一丁目八九一番地
寺下松壽
一丁目八九二番地
若山由藏
小宮登利藏
一丁目八九三番地
市川久子

宮崎一郎
坪井勝重
立花德幸
佐々田方 武田榮
森田九兵衞
佐久間留治
山田喜久夫
山田方 久保田侑男
一丁目八九五番地
堀江清勝
堀江方 堀江富雄
一丁目八九八番地
生澤安吉
金子又五郎
金子方 中川トヨ
倉田林平
一丁目九〇〇番地
増山淺一
龜山竹信
坂本次雄

蔓手仁一郎
蔓手春巳
一丁目九〇一番地
飯島一郎
一丁目九〇二番地
秋元美代四郎
一丁目九〇五番地
江原方 齋藤敬太郎
〃 海藤十
齋藤方 飯島一一
横山喜太郎
横山八郎
及川泰
佐藤セツ
成田八十吉
止部勇
風間吉太郎
一丁目九〇六番地
野中清志
後藤隆一

吉原幸二
中村留吉
松本千代松
杉田テイ
高橋文治

一丁目九〇八番地

堀江定都
山口庄助

一丁目九〇九番地

小柳勝治
小田垣東作

一丁目九一〇番地

北村方 佐納光子
北村欽子
高橋竹藏
田中北男
高野亮
定方七郎
高野巳三郎
中村仙太郎

中村方 中村清

一丁目九一一番地

田口輝藏
田口方 岩崎國太郎
田口ハナ
服部久作

一丁目九一四番地

鳥居春市
小俣光三
土方敏男
牧田定右衛門
青田澄人
高木正吉
熊倉武
大澤留吉
小林又吉
熊倉政雄

一丁目九一五番地

牧田正雄

一丁目九一六番地

秦正治
増田政治
江原方 江原良助
清宮義昭
勝沼澿助
石坂源藏
河野克己
鬼頭繁男
淺香龜吉
佐久間又一
里島寅吉
齋藤新次郎
澁谷廉夫

一丁目九一七番地

宮崎方 田上茂
三浦郁郎
近澤要
栗原猪太郎
馬場誠一
三浦方 河口定雄

一丁目九一八番地
増田辰造
茅野止也
邊見巳代次
石川カイ
鈴木ひさ
根本米五郎
池内甚之助
一丁目九二〇番地
石毛延
青柳文衞
宮崎春吉
板垣三郎
中村けい
一丁目九二四番地
小澤健二
淺見なか
松永浪次郎
阿部チズ
阿部和三郎

阿部德一
一丁目九二五番地
山口七郎
惠木ひろ
惠本方　佐藤ナミ
高野登吉
池畠利勝
政所幸次郎
荻原壽命吉
嶋倉義治
一丁目九二六番地
和田方　西島由男
外谷常作
外谷方　外谷孝一郎
志村重次
林睦夫
安藤林三
和田秀雄
和田方　明石和一

一丁目九二七番地
高橋大作
近井利雄
一丁目九二八番地
淺賀覓
須貝榮三郎
大井與作
淺賀淸作
小川邦郎
小川方　岡本久三郎
一丁目九三〇番地
高野守一
山谷定吉
池田淸
荘伊兵衞
一丁目九三四番地
岩田梅藏
一丁目九三八番地
松村正一
熊木美代子

佐島善志
伊藤健孝
丸山よし
恩田一義

一丁目九三九番地
伊藤正一郎
廣田弘
阿部又七
和田久治
遠藤經重
堀江政清
遠藤春吉
松木清一
井上光
高野定良

一丁目九四〇番地
矢島六平
矢島方 山本八重
栢沼禎一

一丁目九四一番地
岡野慶三郎

一丁目九四二番地
伊澤彥太郎

一丁目九四三番地
堀江善右衛門
堀江克子
堀江松五郎
鈴木茂夫

一丁目九四四番地
里見平吉
里見方 中村忠雄

一丁目九四五番地
堀江榮一郎

一丁目九四六番地
佐藤清
伊丹守
松浦廣

一丁目九四七番地
坂本勇
安田秀尊
堀江平次郎

一丁目九五三番地
石井きよ
堀江松太郎
高橋貢

一丁目九五五番地
堀江秀道

一丁目九六〇番地
峰島きゑ
井戸義夫
大郷力藏
旅館内 鈴木多乃江
藤野慶一
齋藤定雄

一丁目九六七番地
津山庄藏
館野正雄

一丁目九六八番地
戸森あさ子

一丁目九六九番地 小宮山生長
一丁目九七一番地 出口源
一丁目九七二番地 高橋德三郎
出口方 永島イウ
一丁目九七三番地 榎本武雄
須賀ひさ
高橋元久
山同武雄
一丁目九八七番地 遠田豊作
一丁目八一番地 伊藤誠一郎
一丁目一六六番地 竹内織雄

堀船町二丁目

二丁目一番地 櫻井仙吉
二丁目二番地 定村政一
田畑孝治
二丁目三番地 逆井德次
小宮柳藏
小宮善之助
二丁目五番地 佐々木巳之藏
島田太作
園部はる
島田正夫
二丁目七番地 中村小靜
竹内光子
池谷秀雄
柴澤智子

二丁目一〇番地 逆瀬川盛章
杉村初年
廣居半一
松島保
二丁目一一〇番地 石神新吉
二丁目一二四番地 高安郡司
二丁目一三二番地 石神榮藏
石神勇藏
二丁目一三三番地 平田重次
石神武夫
二丁目一三九番地 坂本久三郎
坂本方 大谷國藏
二丁目一四〇番地 鬱沼一雄

鈴木みよ
相澤喜男
田中勳
阿川梅吉
阿川方　阿部仁
阿部方　阿部三郎
萩原一雄
阿川方　長島銀一
仁平吉夫
二丁目一四一番地
田中静太郎
田中隆次
二丁目一四二番地
須の内カネ
杉生敏史
杉井尚
二丁目一四三番地
越野克二
越野方　地具宏
牧野瀧治

小迫實造
佐藤喜兵衛
小迫和子
宮下和夫
二丁目一四四番地
三上との
三上孝
坂倉万次郎
久保秋泰藏
仲井四十喜
二丁目一四五番地
山中みと
正田字一
鈴木正憲
二丁目一四八番地
野村菊彌
二丁目一五一番地
内匠正夫
長坂勝弘
一木定治

二丁目一五六番地
杉井猛
二丁目一五七番地
田中榮吉
田中孫巳
二丁目一六〇番地
田中隆
竹内哲也
岡田一喜
平山寅吉
長谷川政芳
二丁目一七〇番地
田中春次郎
二丁目一七一番地
石神徳太郎
石神與八
二丁目一七五番地
杉田ふく
杉田國太郎

二丁目一七六番地
宇井久代治
堀越丑治
二丁目一七七番地
島村智光
河合竹三郎
二丁目一七八番地
和田常子
和田時男
和田亀太郎
高木徳次郎
二丁目一八〇番地
小幡四平
宮崎弘美
宮崎榮二
中野正夫
二丁目一八五番地
小林廣之
千田專助
平栗モト

福島大典
廣瀬良祐
荒木六太郎
古川喜六
杉浦芳次郎
小森喬雄
高橋ふじ
吉田源一郎
高橋方
二丁目一八六番地
大越春二
芝山勝
加藤光二
金澤定美
切敷正吉
二丁目一八八番地
神谷圭三
二丁目一九〇番地
萩原新吉
林正義
栗原長吉
林方

林方
菅野新助
菅野稔彦
峯田嶺吉
吉澤啓次郎
馬場富美夫
馬場方
後藤正彦
二丁目一九二番地
阿部德一
菅野方
菊池茂夫
勝沼篤
二丁目一九八番地
相馬貞造
藤原フヂヨ
住谷俊三
相馬利助
荒川遊園地内住宅
大西一生
鈴木初雄
栗田四郎
田村重信

大内能夫
藤崎一
今井俊英
大島清次
内田茂子
山根武史
鹽原正敏
大津清
水村外吉
土屋一之
大森繁三
小林一誠
武治吉
和田キチ
操木邦夫
東方近雄
松本三次郎
並木すゞ
上條一
島村貢

飯塚洋子
神尾於治
奥出良子
志村直孝
西山亮一
吉田保
本多勇三
山田三郎
鈴木喜久柄
阿部定利
萩原宗次郎
水本ゼン
金安清
峯村三玄
鈴木勝惠
小倉正一郎
佐藤ミツ
並木兼吉

祝堀船鄉土史刊行

北區長　高木惣市

東京都議會議員

富田直之

北区神谷町二丁目八三番地
電話赤羽(80)四四八四番

王子運送株式會社

取締役社長 濱野清吾

北区神谷町二丁目一一三一番地
電話赤羽(80)（三四〇一番・三六〇五番
（三六四〇番・三九〇一番

齒科一般

默堂青山政行

北區堀船町一丁目七三番地
電話王子（81）五二九七番

北區議會議員

水野新治

北區堀船町一丁目四十二番地
電話王子（81）二九六二番

冨士屋酒店主

梶原銀座通商店會々長

小宮山嘉藏

北區堀船町一丁目一三三番地

電話王子（81）四〇九五番

銅鐵商

和田武志

北區堀船町一丁目一六二一番地

電話王子(81)三〇〇八番
（四二六三番）

銅鐵、機械
非鐵金屬、材料

平井商店

平井三男

北區堀船町一丁目一六二番地
電話王子(81)三五四〇番

寶燒酎
寶味淋
寶本直し
寶新清酒
清酒松竹梅
オールドアイデアルウイスキー
寶ポートワイン

東京都北区堀船町一丁目三九二番地

寶酒造株式會社王子工場

工場長　宮本常男

電話王子(81)
四五六三番
四五六四番
四六五二番
二二六一番

小學校、中學校用檢定教科書
全　文部省著作教科書　發行

東京書籍株式會社

取締役社長　山田三郎太

東京都北區堀船町一ノ八五七

電話王子(81)
三一四〇・三〇八〇・四六四六
三一五三—三一五五
二四九二・四四四七（編集部直通）

南國船舶株式會社東京造船所

常務取締役
所長　井手錦之助

北區堀船町二丁目一六〇番地

電話王子(81)
三九一一番
三九一二番
三九一三番
三九一四番

内科・外科

鹿田醫院

鹿田　定

北區堀船町一丁目九五番地
電話王子(81)五二二八番

株式會社
堀江味噌釀造所

專務取締役 堀江善右衛門

北區堀船町一丁目九四三番地

電話王子(81)

二〇二八番
二二二六番
三二七三番

專賣特許　水越式完全燃燒装置

（本發明により藍綬褒章下賜）

水越燃燒工業株式會社

社長　水越勇次郎

北區堀船町一丁目一八一番地

電話王子(81)三三二〇一八五五番

各種木材、建築用材

⌂高

高橋材木店

高橋　要治

北區堀船町一丁目一八四番地

電話王子(81)三八四九番

健康保險醫

三堀齒科醫院

三堀健次

北區西ケ原町一四七五番地

製鋼原料一般

銅鐵商 村田嫌二

北区堀船町一丁目一二七番地

土砂・砂利・採集
セメント・土管・割栗
建築材料問屋
（各工場納め）

問矢新市

北區堀船町一丁目四六三番地
電話王子（81）二四二七番

塗料・染料・顏料・藥品

大進塗料株式會社

社長 政所幸次郎

北區堀船町一丁目九二五番地

電話王子(81)
〔三四〇五番
〔四一八二番

製鐵原料、銅鐵機械、鑄物其他

株式會社

吉田商會

社長　吉田作次

北區堀船町一丁目一八六番地

電話王子(81)四〇四三番
四五三一番

東京都御用
一般建築・請負
小日向建設工業株式會社
取締役社長　小日向　寛
北區堀船町一丁目九五一番地
電話王子（81）
三七五五番
二七八一番
四七五二番

乞御照會相場表呈上

營業案內

銅・眞鍮・鉛・亞鉛屑・其ノ他輕金屬屑
一般非鐵金屬屑買受並ニ販賣
伸銅製品板・管・棒販賣

株式會社東洋伸銅所指定納入代行店

地銅問屋 株式會社 和田商店

取締役社長 和田實

北区堀船町一丁目九三九番地
電話王子（81）五二一五番

各種ゴム印製造

原ゴム印製造所

原　武雄

北区堀船町一丁目七六〇番地
電話王子（81）四六七五番

石神家の家系（寫）

清和天皇の孫、貞純親王より七代を經て石神土佐守信秀、文明三年當地に來住して一家を創立す。

一代　石神土佐守信秀
二代　同　因幡守重俊
三代　同　藏人
四代　同　左衛門信義
五代　同　久兵衛信茂
六代　同　勘兵衛
七代　同　勘兵衛
八代　同　勘兵衛
九代　同　久兵衛
十代　石神久兵衛
十一代　同　吉兵衛
十二代　同　久兵衛
十三代　同　勘兵衛
十四代　同　源兵衛
十五代　同　與八
十六代　同　與八
十七代　同　與八
十八代　同　與八

十九代は當主
石神德太郎相續す

以上　石神家

伊藤呉服店
伊藤銀一郎
梶原銀座通り

入院設備完成

飯田助産院

助産婦　飯田とく

北区堀船町一丁目一八一番地
電話王子(81)四七四六番

御客様本位の
親切な店

質店

石井與五郎

北区堀船町一丁目二六七番地
電話王子(81)二五二五番

堀船で一番勉強するので評判の
洋品・雑貨何でも揃ふ

青木洋品店

店主 青木初太郎

梶原銀座通り

糸類、綿、フトン、蚊帳
毛糸、洋装、雑貨

白木糸綿店

白木馬之助

営業所 堀船町一丁目一五〇番地
（梶原銀座通り）
工場 堀船町二丁目一八六番地

染物洗い張
練抜専門部

㊎耕

鵜澤耕一

北区堀船町一丁目一一五番地
(梶原交番裏)

生めん、ゆでめん、
中華そば

長谷川製麺所

北區生麺工業協同組合
王子支部長

長谷川一

北区堀船町一丁目一五〇番地
(梶原銀座通り)

牛豚精肉
ハム・ソーセージ
カツレツ・コロッケ
お惣菜もの

二葉精肉店

二葉庄蔵

梶原銀座通り

鰹節。乾海苔。漬物
海産物。罐詰類。食料品一般

中村屋食料品店

加藤末一

堀船町梶原銀座通り

酒類、味噌、醤油
罐詰類、食料品
升本屋酒店
横澤熊次
北區堀船町一丁目二六〇番地
電話王子（81）三六八六番

溫泉旅館
梶原旅館
飯村定男
堀船町一丁目八一番地

うまいやすい

酒

味噌　醤油　砂糖

罐詰　石鹸　調味料

は是非當店へ……

寶酒造通り

伊勢末酒店

河根春治

電話王子(81)三三三五番

洋服、洋品一般

仕立直賣

林洋服店

林　森之助

堀船町一丁目梶原銀座通り角

電話王子(81)四八七二番

堀船郷土史の
發行を祝す

堀船小學校PTA

校長 手塚喜四郎
會長 田中芳枝
副會長 石井與五郎
會計 村田嫌二
書記 清水喜造

米穀・薪炭・精米
（梶原屋）
脇野商店
脇野正治
梶原電停際・電車通り
電話王子(81)5376番

時計と眼鏡

小泉時計店
北区堀船町1～79
（梶原銀座通り）

處方調劑・化粧品・賣薬一般

三王堂藥局

根本　　昇

北区堀船町1～80
電話王子(81)5361番

東京都公認建築請負業
住宅金融公庫の御用も御相談に應じます

石井英四郎

堀船町1丁目100番地（梶原銀通中央）

各種クリーニング　㊣　洗い張りせんたく

丸正洗染株式會社

篠田武夫

營業所　北区堀船町1～162
出張所　北区豊島8～17

常に良い品を

風呂桶類 製造販賣

修繕も致します

（梶原の桶や）

安原才次郎

北区堀船町1～160

處方調剤・賣藥・化粧品

中澤藥局

中澤友義

北区堀船町梶原銀座通り

電話王子（81）4604番

藁工品・製紙原料

壁材各種つた製造・木箱製造

竹内商店

竹内一義

北区堀船町1～162

電話王子（81）2592番

キャンデー・アイスクリーム・製造卸小賣
「そば部新設」味がよいので大好評
餅菓子・和菓子・ちんもち
伊勢や 北 む ら
北 村 久 松
北区堀船町一丁目二〇〇番地

紳 士 服 御 仕 立
清 川 洋 服 店
清 川 義 幸
梶原銀座通り（小泉時計店わき）

慶弔造花。神佛葬祭具。諸式場内外装飾
御貸衣裳・黒ムク・羽織袴・モーニング式服御用達
東京都都民葬儀指定取扱店
都北葬祭株式會社
梶原承り所 竹 内 鐵 雄
梶原電停ソバ 電話王子(81)4751

機械と工具

機械工具・傳動機・ボールトリベット
度量衡計量器・パイプ・鐵管繼手

株式會社 小宮商店

北区王子5の2
電話王子(81) 3453・2430

株式會社 坂本鍛工所

代表取締役 坂本虎男

北区堀船町一丁目四五二番地
電話王子(81) 4206番

木箱。荷造箱。製造

吉田木材木箱工業所

吉田清

北区堀船町一丁目六九番地

内科。産婦人科

池田醫院

池田桃右衛門

北区堀船町一丁目三七〇番地
電話王子(81)二三七三番

北區結婚相談所

所長 村井 邦

北区岸町一ノ五北区立王子圖書館内
電話王子(81)四〇二一番

齒科一般

山本齒科醫院

山本順造

北区王子町一三五五番地
(地蔵尊ワキ)
電話王子(81)三〇七三番

午前宅診・午後往診

助産婦 亀廣壽世

北区堀船町一丁目一五一番地
電話王子(81)五三七三番

王子保安協會常任理事
王子保安協會防犯副部長
民生委員・兒童福祉委員

堀江定都

北区堀船町一丁目九〇八番地

酒類・味噌・醤油・罐詰類
其他調味料一式

大島酒店

大島大三郎

北区堀船町一ノ七二六
電話王子(81)四七四二番

創立大正八年
セルロイド生地製造用諸機械製作

平山製作所

平山義範

北区堀船町一丁目八七八番地
電話王子(81)二五一二番

諸機械製作並修理
各種齒車齒切加工

北井鐵工所

北井清太郎

北区堀船町一丁目三一七番地
電話王子(81)四七三七番

富士號。ヒドリ號
ノーリッツ號
山口自轉車のマルワイ號
代理店
確實な修理と商品の店！

内田自轉車店

内田亀太郎

北区堀船町一ノ三六二

建築士
土地家屋調査士
建築代理士

建築一般
工場計畫
出願代理
測量製圖

井桁設計事務所

井桁理助

北区堀船町一ノ二六七

安心して買える店！

王子驛前

イトウヤ洋品店

伊藤一郎

電話王子（81）五三五〇番

安くも買はず
高くも賣らず　眞にサービスの店

家財道具　何でも買います
何でも賣ります

樂器　いろ／＼な出物澤山あり
御不用品勉强して買ます

衣類　洋服、和服、毛布、フトン、何でも
便利に御用を伺います

天下の古物商　加藤商店

加藤信一

堀船町一ノ八八（梶原銀座通り）

自動車用タイヤー。チューブ
再生修繕。附屬品一式販賣

關口タイヤー商會

關口亀雄

北区堀船町一丁目二〇五番地
電話王子(81)四一五〇番

電機通信機資材各種

蒦手政次郎

北区堀船町一丁目九〇〇番地
電話王子(81)三七八六番

諸建築請負業

篠田甚五郎

北区堀船町一丁目一五八番地

特に金融公庫利用の方は手續其他代行
等御便利に親切第一にお扱い申上ます

諸建築請負
建築業

河合竹三郎

北区堀船町二丁目一七六番地

毎度有難とう存じます
◇いつも勉強して
御客様に愛される店◇
書籍、雑誌
教育玩具
三、五雛人形
栗原商店
梶原銀座通り

日用雑貨、荒物
食用油「豊年」
秋葉商店
秋葉榮藏
北区堀船町一丁目九四番地
（梶原銀座通り）

児童福祉法による認可施設
木の実保育園
北区堀船町一丁目二五一番地

青果物各種
安八百屋
武田利雄
北区堀船町一丁目二二八番地

千代田式編物器械格別に
お取次いたします

婦人子供服御仕立（洋裁部）

毛糸編物教授。編物の事なら何でも御引受いたします。
秋に入ると多忙になりますから夏中に冬の御支度をおすゝめ申上ます。

天野編物教授所

北区堀船町一丁目一五一

紙器
紙工品
箔押

各種ボール箱製作

高野紙器工業所

北区堀船町一ノ九一〇

高野巳三郎

きそば、天ぷら

砂場そば店

高橋一助

北区堀船町一丁目九四番地

薪炭卸問屋

秋田屋商店

小林哲次郎

北区堀船町一丁目二六二番地
電話王子(81)二二八〇番

銅鐵商

株式會社 富正商店

取締役社長 澤井正富

北区堀船町一丁目七九八番地
電話王子(81)二六〇九番

電氣・酸素・熔接・鐵工一般
化學應用器械製作

(舊渡部熔斷工業所)

新光鐵工株式會社

代表 渡部貞次

北区堀船町一丁目一八二番地

諸建築請負

建築業 渡邊幸七

北区堀船町一丁目一五一番地

內藤製函所

內藤力松

北区西ヶ原町一四六〇番地
電話王子(81)四〇一九番

名入番傘製造卸代理店

ウチワ・扇子・カレンダー
サービス宣傳用マッチ

店主 堀口米作

堀船町一丁目三四九

（多少に拘らず御用命下さいませ
御通知次第見本をお目にかけます）

電氣熔接
酸素熔接
自動車修理
鐵骨製罐
パイプ排罐工事
出張請負

清水建設株式會社
協和工業所

谷口兄弟工業所

谷口昇
谷口忠義

北区堀船町一丁目五二九番地
（寳酒造會社王子工場正門前）
電王（81）四五六四呼（寳酒造）

土木建築 請負
附帯工事一式

東京東北電氣工事工業協同組合員

有限會社 吉田木材工業所

吉田秀治

北区上中里町三七一番地
電話王子（81）四八四六番

各種燃料商

新谷堯商店

堀船町一丁目一四〇番地

◇出前迅速◇

味の花ずし

是非御用命下さい

堀船町一ノ九三

"何時もニコニコ勉強の店"
資生堂チエーン・ストアー
化粧品小間物専門の店
吉田化粧品店
梶原銀座通り（地藏尊隣）

電氣工事一般・ラジオ月賦販賣
東京電機商會
渡邊進平
梶原銀座通り

パーマネント
カスガ美容室
堀船町一丁目七九番地

疊床ハ當店ノ責任アル自家製疊機ニテ御奨メ致シマス
上敷ゴザ
疊工事
一式請負
濱野疊店
北區堀船町一丁目一五八番地

文房具。日用品。雜貨
三笠堂　相笠文具店
堀船町一丁目二三〇番地

アイスクリーム・アイスキャンデー
冬は中華そば・ワンタン・和洋菓子
のんき
店主　戸田宗一
堀船町一ノ八〇六　電話王子（81）五二五七番

寫眞の御用は是非當舘へ！
（出張撮影も早速お伺いいたします）
渡邊寫眞舘　渡邊林之助
王子町一ノ一四（電車通り石井藥局横）

坂本タバコ店
坂本久三郎
堀船町二丁目一三九番地

つくだに
菓子類

廣瀬良祐

堀船町二丁目一八五番地

東京北區堀船町一ノ九一四

東京細巾染色株式會社

電話王子(81)四八七三番

御調髪は親切・勉强・技術優秀な

高橋理髪店

高橋福三郎

堀船町一丁目九三番地

北區堀船町一丁目七二七

旭光商事株式會社

電話王子(81)二二八一番

生菓子と干菓子

都王菓子店

倉橋保太郎

上中里町三八七番地

諸機械部品工作
果實保護袋用
北金及磁石
製造販賣

小林製作所

堀船町一丁目一七一番地
(梶原電停前)

壁一式請負

左官職 石川賢司

堀船町一丁目一五九番地

竹材一式・丸太

竹宗牛川竹店

牛川正一

堀船町一ノ七八五 電話王子(81)二九二八

金屬型彫刻
檜山義龍
堀船町一丁目一五〇番地
（梶原銀座通り）

建具各種製造
白田秀一
北区堀船町一丁目一六二番地

和洋紙
紙工品
文房具
事務用品
ふじや文具店
北区堀船町一の一二〇番地
（梶原銀座突當り）

各種鍍金・金屬着色
東邦電鍍工業所
須藤賢一
堀船町一丁目八三七番地

男女くつ販賣修繕
市川靴店
市川鹿之助
梶原銀座通り

家具製造
向山民次郎
堀船町一丁目一四六番地

乾海苔問屋
㊐喜
田中商店
堀船町一丁目二六〇番地
電話王子（81）四八一一番

上田屋精肉店
梶原銀座通り突當り

東京都配給パン指定
教育局學校給食指定
洋菓子製造

日の丸パン工場

島田太作

北区堀船町二丁目五番地
電話王子(81)二八三八番

取扱營業品目

SK油脂工業KK
SKマルセル石鹼
SKコナ石鹼

王子化學KK
王子マルセル石鹼
丸型・龜ノ子型

諸官廳・諸會社・各從業員組合
埼玉縣勞働者福利厚生協同組合御用

代理店
合資會社 三葉商事
代表者 西郷昇一

東京都地区營業販賣所
東京都北区堀船町一丁目一九九
電話王子(81)三五四〇番(呼)

埼玉縣川口地区營業所
川口市驛前デパート内
電話川口三七七一番(呼)

埼玉縣浦和地区營業所
浦和市北浦和町四丁目一八番地
電話浦和三〇一六番

石井幸三郎

趣味と教養の會 あけぼの文化サークル開設

顧問 學藝大学々長 木下一雄先生
顧問 高木惣市先生
仝 中河幹子先生
仝 歌人 木村萬春先生
仝 吉田キク先生

同人 山本ふじ
仝 大竹菅子
仝 水越たけ
仝 牧田八千代

一、本會の精神

會員相互の教養を高め文化の振興と親和向上をモツトーとして、平和國家建設に邁進いたしましよう。

どなたも御気輕に御入會下さい。又同好の方々の温習や、奥様方の憩の場とも致し度いと存じますので、各層の皆様方が御心やすく此の「あけぼの文化サークル」に御入會御利用下さい。

二、課目並に担當教師

課目	流派	教師
俳句	鼎吟舍	吉田巡川先生
箏曲	山田流	塩見春能先生
茶道	月派	阿部桂月先生
舞踊	藤間流	藤間幸榮先生
小唄	田村派	田村万千代先生
短歌	歌人	山川京子先生
謡曲	觀世流	水野洋三先生
華道	古流	鈴木理景先生

◎其の他手藝（編物・日本人形）等も逐次開講豫定

三、教場

王子圖書舘内（北區岸町一ノ五）

小唄教場 梶原銀座通り中澤喫茶店方

自午後四時 至午後十時（但月曜、金曜）

四、教授料

各科金參百円（週一回）
金五百円（週二回）
入會金貳百円（各科共通）

◎五人以上團体申込に特典あり

五、申込所

入會規定其の他の御問合せは本會事務所 王子町一三五五番地（電話（81）三〇七三番山本ふじ）

◎隨時入會申込を受付けます

曜	課目	時間
月	俳句	午後七時－九時
	箏曲	〃二時－八時
	茶道	〃二時－八時
火	舞踊	午後三時－六時
水	小唄	午後一時半－四時半
	短歌	〃五時－八時
木	謡曲	午後二時－八時
金	華道	午後三時－八時
	小唄	〃一時－四時
	箏曲	〃二時－八時
土	舞踊	午後三時－六時

◎御申込は 左記で受付けます。

北區王子町一三五五番地 電話王子（81）三〇七三番

山本歯科醫院内 山本ふじ

青物・果實
荒井千代松
梶原銀座通り

中澤喫茶店
小林よね
梶原銀座通り入口

壽司と御料理
壽司勝
上中里三九七
電話三八五九番

大黑樣をお祭りする會
福神會（牧田方）
堀船町一ノ一五八
電話王子(81)二八四五

化粧品・小間物・雜貨の
御用命は
親切と勉強の店
ゆたかや化粧品店
店主　望月武
堀船町一丁目一五七番地
（梶原銀座通り入口）

編集後記

財産があり、ひまがあつたら、こんなことをやるのも、わけのない仕事ですが、金もなし、ひまもない貧乏人の我々が、こんな事を計畫する事が、おこの沙汰ながら、町の各位の御支援を得て一旦發表して見れば一日も早く發行し度いと考へ、望月君と共に奔走した次第です。

何をやるにもまづ金の事を考へなければならず、全豫算を廣告料收入でまかなうというのですから廣告が集るか否かという事が發行出來るか否かを決する鍵でもあつたのです。

四月初旬から廣告勸誘に着手したのですが、訪問した人々の殆んど全部の方々が、此の勸誘に應じて下さるのみならず、慰めの言葉や、激勵の辭さへおしまない、そのおほらかな態度には全く感激を新たにした次第です。

おかげ様で早くも廣告募集の豫定額に達し、編輯に取かかつたのでありますが、專門に事務を擔當する者がある譯ではないのですから、不備もあり、不行屆きも多い事と思います。

「居住者名簿」は松村昌信氏に編纂を託し、仝氏の骨折で出來たものですが、二丁目荒川遊園内住宅は特殊の扱になつているという關係から、石神德太郎氏の肝入りで石神榮藏氏を煩わせた次第です。

同人としては町の同情が集つて、兎に角豫定の通り目的が達せられるという事は全く感激にたへない次第で何らかの形において、この感謝を表はし度いというので協議の結果、バッヂを作製する事に決し「堀船」を象徴する様な圖案をというので入船に堀の字を配する事として上島氏の筆により五月二十二日に出來上つたので、二十五日には福性寺で、入魂祭を田久保先生をわずらわして執行した。

その目的は、堀船の繁榮と、之をかける人々の幸福を祈願して單なる紀念としての品であるばかりでなく身の護り、家の守りとして前途を祝福して、些か同人等の感謝のまことを表し度いという念願からである事をお察し願へれば幸甚之れにすぎない。

同人の感激と御禮のことば

此の企を發表するや町を擧げて賞讃をいただき、協賛會が結成された事、廣告募集のため訪問してみれば好意と同情とを以て迎へられた事、協議して頂き度い事や御相談願いたい事があつて御會合を願うと萬障くり合せて御出席が願われた事、鈴木君も全能力を擧げて製版、印刷に努力せられた事、等積極的に御援助が願われた事が無事に發行を成遂げしめたもので一同深く感激して居る次第であります。茲に謹しんで厚く御禮を申上ると共に、將來共一層の御援助を御願い申上る次第であります。

昭和二十七年六月一日

責任者　牧田平次郎

鏡各種
ガラス一般
板ガラス
ガラス食器

畑中硝子店

畑中孝造

堀船町一ノ一四八（梶原銀座）
電話王子（81）四五一三番

堀船郷土史 奥付

非賣品

昭和二十七年六月五日印刷
昭和二十七年六月八日發行

著作者 田久保周譽
編輯兼發行人 牧田平次郎
印刷人 鈴木晃
東京都北区岩淵町二ノ三二四

東京都北区堀船町一ノ一二六「ほりふな」發行所内
發行所 堀船郷土史刊行會
電話王子（81）二八四五番

マツダランプ
マツダ眞空管

シャープ・ラジオ

新強力型
ナショナルモートル

各製品特約販賣店
電氣工事・ラジオ一式
白鳥電氣商會
渡邊喜久三
東京都北区堀船町1〜80(梶原銀座通り)
電話王子（81）2551番

ほりふな發行所刊行

後編

堀船郷土史平成増補版

堀船郷土史を語る会編

一、歴史・遺跡増補篇

1　福性寺所蔵の板碑

北区飛鳥山博物館
石倉　孝祐

板碑とは、鎌倉時代から戦国時代にかけて造立された石製の供養塔婆である。秩父地方産の緑泥片岩を材料とし、関東地方では中世を通じて約4万基が確認されている。板碑は上部を三角に形作り二条の切り込みを入れ、表面上部に大きく本尊をおき、その下に紀年銘や願文を彫るものが多い。また仏の教えや仏菩薩の徳を讃える偈や真言を刻むなどして、追善供養や逆修供養を目的に作られた。

さて福性寺には9点の板碑が所蔵されている。その中から特徴的なものを紹介したい。福性寺所蔵板碑で最古の南北朝時代の暦応2年(1339)12月25日銘阿弥陀三尊種子板碑がある。観応2年(1351)銘の阿弥陀一尊種子は、鎌倉時代の本尊と紀年銘あるいは偈が付随した形式から、建武年間以降に盛んになる花瓶をともなう形式を示し、紀年銘の両側に花瓶を一対置く形態をみせる。一般に応永年間（1394~1428）以降は、花瓶の代わりに法名をいれる、いわゆる個人板碑に変化していくが、この変化はそれまで集団で造立した板碑が、墓標化する過程を示すものである。はたして福性寺の応永4年（1397）銘板碑には花瓶はなく「妙秀禅尼」と彫られ、正長3年（1430）銘板碑にも「永春禅尼」と刻まれている。さて正長年号は正長2年で改元され延享となったが、それではなぜこの板碑には本来存在しない正長3年銘が刻されているのだろうか。その答えは当時、関東を支配した関東公方足利持氏の動向にある。持氏は足利将軍位に就くことをのぞみ、継承をめぐって将軍義教に対立した結果、改元に従わなかったのである。政治過程が板碑にも反映していることが知られる。

また福性寺には福徳2年（1491）銘の板碑が伝来している。しかし朝廷が定める元号に「福徳」はない。この福徳元号とは私年号と言い、戦

国時代の関東で広く使用されたもので、民衆の天災や飢饉からの救済願望がその文言に込められているのである。
もの言わぬ板碑からは、実に様々な歴史情報がタイムカプセルのように伝わってくる。

編者註、この板碑の写真は27ページにある。

2　梶原塚と梶原政景

北区飛鳥山博物館
石倉　孝祐

現在の堀船3丁目6番に所在する都下水道局王子ポンプ所付近に、かつて梶原塚と呼ばれる古跡が存在した。梶原堀之内の地名の由来である梶原塚は、『江戸名所図会』によれば梶原源太政景の墳墓であるとされている。寛延4年（1751）酒井忠昌成稿の『南向茶話』によると、梶原の地はかつて「鎌倉海道」が通る交通の要衝であった。酒井忠昌は梶原堀之内の地に直接足を運び「此地ノ名主ニ名兵衛ト申者」から梶原塚は、「古来寺ニシテ、シンセウ寺ト云寺アリケルカ、川へ欠イリテ地所迫リテ没シヌ」という伝承に接している。はたして『江戸名所図会』の記載によれば、「享保の頃迄ハ石碑・石壇ありしか、洪水の時、豊島川（荒川）へ崩れ込ける」とあり、現在、福性寺の境内には梶原塚に由来する宝篋印塔をはじめとする石碑が多数移されていて貴重な歴史資料となっている。

さて梶原政景とは名を別に景資と唱え、源太、源左衛門と称した。戦国時代の岩槻城主太田資正の子として生まれた武将である。『年代記配合抄』によると、天文17年（1543）に生誕した。太田姓から梶原を名乗ったその理由として同書には、永禄4年（1561）に上杉謙信（輝虎）の関東管領職就任に際して、輝虎自身が政景に梶原姓を名乗らせたと記されている。当時、関東公方足利義氏が御座していた鎌倉において政景は元服したが、公方足利義氏は鎌倉府以来の奉公衆梶原氏の存在が広く知られていることに注目し、政景の公方奏者としての政治的機能を期待したことが窺え

る。政景は『小田原記』によると、「鬼にも神にも逢ふべき器量」であるとともに「和歌の道に心を懸け」「諸芸に名」を顕す存在に成長した。しかしその後、家臣の内訌に悩まされ、また北条氏などによる関東の戦乱に翻弄され岩槻から宇都宮、また房州里見氏、常陸佐竹氏に頼り、最後は越前松平家に属し慶長19年（１６１４）大坂夏の陣に参陣したことまでが資料上確認されている。

3　堀船のレンガ工場

北区飛鳥山博物館
田中　葉子

西洋の煉瓦製造技術がもたらされたのは幕末期のことであるが、明治政府が西洋に倣った都市づくりを進めると、銀座煉瓦街の建設や工場、灯台、官庁建物、会社事務所、邸宅、鉄道施設など、次々に煉瓦を使用した建造物が建てられた。煉瓦需要の増大をうけ、現・葛飾区小菅の東京集治監、埼玉県深谷市上敷免に渋沢栄一が設立した日本煉瓦製造株式会社のように大規模な煉瓦工場ができ、中小の煉瓦工場も増えた。明治35年（１９０２）に刊行された『煉瓦要説』（諸井恒平著・発行）によれば、明治33年末の時点で東京及付近四県に45の煉瓦工場があり、年間約１億２８００万個の煉瓦を製造していたという。

とりわけ荒川下流域は、煉瓦の原料となる土の確保が容易であり、舟運や鉄道など製品の運搬に地の利があったため、煉瓦の一大生産地となった。『工場通覧』（農商務省商工局編）で荒川下流域の煉瓦工場の創業年を確認すると、明治後期に創業した工場が多い。しかし、明治時代末から始まる荒川放水路の建設工事により立ち退かざるを得なくなる工場もあり、大正３年（１９１４）の関東大震災を契機にその数は激減した。

『王子明覧』（篠崎慶編、明治42年発行）には、８つの煉瓦工場が記載されており、堀ノ内と船方では以下４つの煉瓦工場が確認できる。

田中工場（大字船方１５７番地）創業明治３年２月、職工18人（男14）

石神工場（大字舟方１２８番地）創業明治14年、

職工12人（男８）
千葉堀ノ内工場（大字堀ノ内２９１番地）創業明治31年３月、職工37人（男20）
廣岡煉瓦工場（大字舟方２０８番地）創業明治33年４月、職工28人（男14）
田中煉瓦工場については、工場の営業願や登窯の図面、煉瓦販売記録などが子孫に伝えられている。工部省・王子製紙会社をはじめとする官庁や大規模会社との取引記録や、煉瓦の焼成方法、煉瓦の材料となる土を取るために荒川周辺の田畑を購入した記録など、荒川下流域での煉瓦工場経営に関する貴重な史料群となっている。

4　延宝時代、安政時代の地図について

福性寺住職
田久保　海誉

梶原堀之内村、船方村、上尾久村、上中里村などに関する延宝時代（千六百七十三年～千六百八十一年、徳川家綱、綱吉の時代）の地図（図１）があります（国会図書館）。

　現在の隅田川（荒川）は戸田川と記載されています。当時の用水は現在は路地となっています。現在の堀船小学校あたりから流れてきた水路は、白山神社と福性寺の間を流れていた水路と合流し戸田川に流れ込んでいます。

　梶原銀座商店街は、鎌倉往還の一部であることがわかります。福性寺の西にあった神明社は、現在は無くなっています。また、梶原塚のあった範囲までは描かれていません。

　さらに、国立国会図書館には安政二年（千八百五十五年、徳川家定の時代）十二月に幕府に提出された武蔵の国豊島郡梶原堀之内村の古地図（図２）があります。

　添書きを北区飛鳥山博物館学芸員田中葉子先生に翻刻して頂きました。この文章の末に田中先生の翻刻を収めました。梶原堀之内村の村役人惣代名主忠三郎（石井忠三郎、明治十七年十二月二十八日亡、九十歳）と名主の補佐役である組頭の常七（石井常七、明治十九年三月七日亡、七十八歳）

から、幕府普請方役所に安政二年に提出され、普請方役所神吉兵左衛門と竜崎豊吉が受け取っています。この二人の村役人の戒名、姓名（俗名）、没年齢は、福性寺の過去帳（霊監簿）に記録されていました。

地図中の数字は筆者が書き加えました。以下を表しています。1、福性寺　2、白山神社　3、梶原塚　4、鎌倉往還　5、神明です。やはり、幕末まで神明社はあったようです。神明社は伊勢神宮内宮を総本社とする神社であり、いつなくなってしまったかをご存知の方はご教示下さい。白山神社と神明社は福性寺の掛け持ちでした。

この地図によると、大きな水路が二つ見えます。鎌倉往還を横断し、現在の堀船小学校への道は、水路であったことがわかります。その下流は隅田川に注ぎます。蛇行して現在のキリン通りを、はみ出してたり、沿っていたりしています。白山神社と福性寺の東側を流れ船方村との境界となっていました。この水路と白山神社と福性寺の間には細い道がありました（永井昭武様談、堀船一丁目）。後に水路は拡幅され白山堀となりました。約九十年後の千九百四十五年の航空写真と比較してみますと、蛇行している川は白山堀となり幅が広がり直線となっています。

一方、現在の堀船一丁目と二丁目を流れる水路の水源は石神井川の堰から、水を引いたもので飛鳥山の湧水もまた一部が合流していたようです。この水路は堀船の田を潤す重要なものであり、農家の間では水争いが起きたことがたびたびあったとのお話や、夜通しで水を守ることがあったと永井昭武様から聞きました。永井昭武様は、このお話を祖母の永井やす様（千八百七十七年、明治十年生まれ）から聞いたとのことでした。用水は王子方面から堀船方面に流れていました。石神井側とこの用水の間の堀江家は、川間（かわま）様、川間堀江家と呼ばれていました。

飛鳥山の湧水やその下流は、この地図には書かれていません。湧水はいくつかあったようです。これらの湧水は、王子方向や田端方向にも流れていました。この湧水に関しては、堀江毅様と永井昭武様（堀船一丁目）から聞きました。現在（平成二十八年）でも、渋澤邸の山の下、御坊坂（おぼうざか）の右手に湧水があり堀船と栄町の境のあたりを流れていました。この湧水の位置は永井昭

武様からお聞きしました。また、飛鳥山の湧水を水源とする小川は、田端の駅の下の低地を流れ西日暮里方向に向かっていました（堀江穀様談、永井昭武様談）。さらに台東区方向にまで向かっていたようです。また、王子駅方向にも流れていました。

北区豊島から続く鎌倉往還は、現在の王子自動車学校の交差点を過ぎると左に折れるまで、かなり蛇行していたようです。ある時期に直線としたために、この部分は現在では道幅が太いところと狭いところができています。左に折れるとその後はほぼ直角に右に折れて、現在と同じようにやや右に曲がって上中里（蝉坂）、平塚神社方向に向かいます。

現在の堀船一丁目からプリントメディア（旧キリンビール）への道は、西ヶ原村からの道と、現在の堀船橋よりやや下流にあった土橋（どばし）を通る王子村からの道に始まり、毎日朝三時頃になると、江戸時代初めの頃から続く千住青物市場（やっちゃ場）に野菜を運ぶ多数の荷車の音がカタコトカタコトと絶え間なく聞こえたそうです。永井昭武様はこのお話をお父様の永井錬一郎様からお聞きになりました。土橋付近の澤部家は土橋様と呼ばれていました。

謝辞　北区立飛鳥山博物館の田中葉子先生に翻刻頂きました。記して深謝いたします。

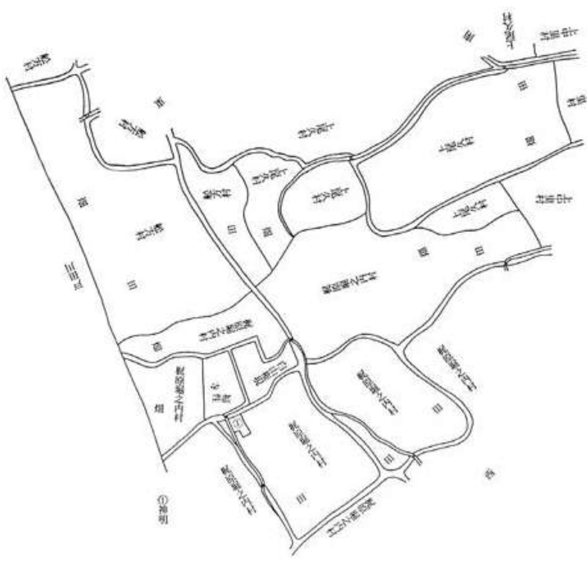


図１　延宝古地図（国会図書館所蔵一部改変）

図２　安政古地図（国会図書館所蔵一部改変）

5　翻刻：武州豊島郡

梶原堀之内村絵図

所蔵：国立国会図書館請
請求番号819・1・101
翻刻：北区飛鳥山博物館
田中　葉子

【冊表紙題簽】

武州豊島郡梶原堀之内村絵図
安政二年十二月（1855年）

【袋表】

五分拾間　上尾久村・舩方村江続ク
梶原堀之内村
豊島村
繪圖面
二枚
安政二乙卯年十一月
武州豊嶋郡
梶原堀之内村

（右下）
寅十二月朔日受取候
神吉兵左衛門
竜崎豊吉

【袋裏】

（貼紙・朱書）「つ」
梶原堀之内村
書上

【奥書】

梶原堀之内村之儀、鎮守白山権現其外福性寺
等々も往古之書類無之、起立之義相知レ不申候
得共、村方
梶原美濃守居所と申墳有之候得共、年暦相知レ
不申、尤同所ニ寺有之候由ニ候得共、川欠ニ相
成、其跡一向
無之、書類ハ勿論無御座候得者、起立相分不申
候、以上
武州豊島郡
梶原堀之内村

村役人惣代
組頭　常七　㊞（石井常七、明治十九年三月七日亡、七十六歳）
名主　忠三郎　㊞（石井忠三郎、明治十七年十二月二十八日亡、九十歳）

安政二卯年十二月

御普請方
御役所

編者註、カッコ内は編者が追加

6　都電梶原電停

福性寺住職
田久保　海誉

堀船の住人の交通機関として誰もが利用したことがあり便利な交通機関は都電であり、町の中には梶原電停があります。この電停は、もとは王子電気軌道株式会社の停車場として始まっています。王子電気軌道は明治43年4月に設立され、電力・電気供給、路面電車（王子電車、王電）、路線バスの3つの事業を経営していた会社です。王電時代の建築物としては、三ノ輪に王電ビルディングがあります。王子電車の開通に関しては、冊子やネット上にも多くの文章の中で触れられています。

東京都交通局のホームページの「都電」などによりますと、明治四十四年（１９１１年）八月に大塚と飛鳥山上（現、飛鳥山）の間に開通した王子電気軌道は、飛鳥山への花見客で人気がありました。また、この年に電力供給事業を開始しました。大正二年（千九百十三年）四月には、三ノ輪（現、三ノ輪橋）～梶原が開業しました。同年十月には梶原～飛鳥山下（現、栄町）間が開業しています。大正4年（千九百十五年）四月に王子駅前～飛鳥山上間が開業することにより、また大正十四年（千九百二十五年）二月、飛鳥山下（栄町）～王子駅前が開業し、三ノ輪から王子駅前を経て大塚駅まで直通運転を開始しました。また、昭和七年までに大塚から早稲田まで、順次に延長され、

早稲田から三ノ輪橋間と、王子から赤羽間に延長されました。

昭和十七年二月には戦時体制の中で、東京市電に統合されました。さらに昭和十八年には、東京都制が施行され都電となりました。

多くの電停に名前の変遷があります。たとえば、昭和十七年ごろまで、荒川車庫前は船方車庫前であったらしい。明治四十四年の開業以来、梶原は一貫して梶原でした。栄町は飛鳥山下でした。電停梶原の命名については、知るところはありません。しかし、江戸時代から続いてきた武州豊島郡梶原堀之内村が大字堀之内に変わり、梶原堀之内村や梶原塚に郷愁を懐いていた住民の意向が強く反映していたことは容易に想像がつきます。

昭和42年からの東京都による都電の廃止計画により、都電は全廃となる予定でした。昭和四十七年十一月に王子駅前~赤羽が廃止となり、さらに現在の都電荒川線を除いて全廃されました。しかし、沿線住民の強い要望により、27系統（三ノ輪王子駅間）と32系統（荒川車庫前早稲田間）が残されて、昭和四十九年に統合され荒川線として現在に至っています。

王子電気軌道の開業当初は会社が小型の電車を自ら作製していました。しかし、東京市電から譲渡された電車が次第に増え、昭和になってからは半鋼鉄製の大型電車となりました。

梶原停留所は梶原銀座商店街（ショッピングロードかじわら）の入り口ともいうべきで位置であり、早稲田方面行きと三ノ輪行きホームは明治通りを挟んで離れています。それでも、梶原銀座商店街を含めた堀船の住民の便利な足であり、繁栄に貢献しています。

7　梶原銀座商店街

福性寺住職
田久保　海誉

明治十六年（千八百八十三年）に日本初の私鉄である日本鉄道の王子駅が開業しました。それ以前から、王子には製紙工場や印刷局の抄紙部が建設され、王子駅周辺、現在の堀船一丁目には人口

が増加してきました。さらに、明治・大正時代から隅田川（荒川）沿いに煉瓦工場や紡績工場などの多数の工場が建設され人口が急速に増加し、それまでの農村地帯としての性格から半都市的な地域へと変貌しました。特に、大正二年（千九百十三年）の王子電気軌道による三ノ輪―飛鳥山下（現、栄町）間の王子電気軌道（王電）・三ノ輪線の開通がこの土地の変化を一層推し進めることになりました。そのころから、王電梶原停留所から鎌倉往還に沿って徐々に商店が開業し、次第に商店街を形作るようになりました。しかし、大正十二年（千九百二十三年）の関東大震災により商店は軒並み倒壊しました。それでも、この地区には震災から逃れて移住してきた人々を含め人口がさらに急増するとともに、宅地化が進み新たな賑わいを見せる街へとたくましく復興し大きな街を形づくっていました。昭和七年（千九百三十二年）に大字堀之内（江戸時代の梶原堀之内村）と大字船方が合併し堀船となり、梶原銀座商店街は旧堀船一丁目の中心となりました。現在、都電梶原停留所から北に展開する梶原銀座商店街は、戦前は道幅八メートルでありました(図3)。すでに太平洋戦争（大東亜戦争）前には、ほぼ商店ばかりが並んでいました（こばやし玩具店小林佐仲様談）。しかし、太平洋戦争時の米軍の度重なる爆撃により、福性寺や白山神社（図4）周辺を除いて、堀船の街は全て灰燼に帰してしまいました（図5）。焼け野原となったこの地域一帯は、戦後の復興に再び努力し、次第に工場、住宅の建設も盛んになりました（図6）。商店街は、この地域の生活を支え夕方には買い物客でごった返していました。工場、住宅、アパートなどの周辺地域の日用品や食料品を中心に、品質の良さと安さを信条とする活発な商業活動が行われてきています(図7)。商店街の中に祀られている愛宕地蔵尊は、江戸時代、この土地を領有していた水野家の本郷屋敷から当地の小泉家が勧進してきたと伝えられ、眼病平癒、火防祈願として広く信仰を集めてきました。この地蔵尊は、古くから梶原に住むすべての人々を温かく見守り、繁栄をもたらしてきたとして、商店街は、毎月三日、十三日、二十三日を縁日と定め、今はやや少なくなってきたとは言うものの、お線香の煙が絶えることなく賑わっています。

図３　昭和15年（1940年）　皇紀二千五百年記念写真　堀船三丁目三十八番地あたり
都電梶原停車場に向かって左側（こばやし玩具店・小林佐仲様所蔵）

図４　昭和15年（1940年）頃　白山神社社殿前（伊藤青果店・野浦よね子様所蔵）

図５　昭和20年（1945年）３月10日東京大空襲直後の航空写真
（米国公文書館所蔵空中写真、一般財団法人日本地図センター所蔵）

図６　昭和40年（1965年）頃　堀船から隅田川（荒川）と足立区を見る
林立する煙突は戦後復興の象徴

図７　平成26年（2014年）梶原銀座商店街マップ

二、堀船の大工場

1　東洋紡績王子工場について

東洋紡株式会社　広報グループ
松下　　豊

王子工場は、１９０８年（明治41年）、下野紡績㈱によって綿紡績の工場として建設された。その後１９１１年、三重紡績㈱との合併を経て、１９１４年６月26日に大阪紡と三重紡が合併し、東洋紡績㈱の設立によって当社の王子工場（東京都王子區堀船町七）となった。

１９２３年９月１日に起こった関東大震災によって、関東地方にある紡績工場が被った損害は、全焼13万３０００余錘、全壊35万１０００余錘、半壊ならびに部分的被害41万６０００余錘、合計90万１０００余錘に及んだ。（錘は紡績機械の単位で、糸１本を巻きつける円錐形のボビン（筒）１本を動かす心棒のことをいう。）王子工場も第一紡績工場、第二紡績工場、原綿倉庫、寄宿舎等が全倒壊し、大きな被害を受けた。従業員の死者は92人、重傷者は19人という記録も残っている。犠牲者に対して当社は礼を厚くして葬り、後に大阪の四天王寺で盛大な罹災者追悼法會を営み、遺族を招待して哀悼の意を表した。

当社は罹災した王子工場を現地に復興することを決め、その建築には災害の原因となった煉瓦造りを廃して、鉄筋コンクリート造りの耐震耐火様式を採用するとともに、残存の建物に対しては、耐震耐火の補強工事を施した。こうして１９２５年末には、精紡機を３万２０００錘強、撚糸機を１万４０００錘弱に復興することができた。

わが国紡績業における深夜操業は、１８８２年（明治15年）に創業した大阪紡から始まったが、従業員の健康、風紀などへの影響を考慮し、深夜操業の廃止を他社に先駆けて実施したのも当社だった。当社では、王子工場の復興を待って、１９２５年の夏ころから試験的に深夜操業の廃止を同工場で行った。この試みが良好な成果をあげ、他の紡績会社もこれにならった。関係官庁もこの結果

に好感をもち、援助を惜しまなかったという。
しかし、太平洋戦争が始まった１９４１年（昭和16年）11月、王子工場は紡績の操業を休止し、翌年１月には東京第一陸軍造兵廠へ敷地建物を一切賃貸することとなった。１９５２年４月に大蔵省から返還を受けたが、まもなく事業を休止し、翌年に工場を廃止した。

関東大震災後の復興作業（未確認）

太平洋戦争前の王子工場

2 キリンビール東京工場の歴史

キリンビール株式会社
代表取締役社長　布施　孝之

日本が高度経済成長期に差し掛かった１９５７（昭和32）年、キリンビール東京工場は、現在読売新聞社東京北工場などがある堀船４丁目２番地に完成した。

キリンビールは戦前、横浜・仙台・尼崎（兵庫）・広島に工場を有していたが、最大の消費地は東京であった。都内に工場を持たなかった当社は、横浜工場の製造数はもちろん、仙台工場の約半数を東京に出荷し、それでも不足する場合は尼崎工場から補給をしている状況であった。そこで、都内に工場用地を探していたところ、東洋紡績王子工場の跡地が１９４１（昭和16）年に操業を中止し、陸軍造兵廠に貸与後そのまま休止中になっているという情報が入ってきた。東北本線が近くを通り、隅田川や荒川の近くであることから、都内へのビール供給には絶好の地であると判断し、直ちに土地を購入することとした。１９５３（昭和28）年に土地を購入、その年の11月に着工した。

当社は、東京工場の建設にあたり、当時の資本金よりも多額の20億円を投じ、当時の最新設備を国内外から導入した。そして１９５７（昭和32）年１月21日にビールの初仕込が行われ、４月１日にびん詰を開始した。完成時の従業員は約２００名、製造能力は１８，０００KLであった。４月10日からは連日数百名を招待し、盛大に落成披露が行われた。折しもこの年はキリンビールの創立50周年に当たり、その祝典もかねて盛大に行事が行われたのである。

１９７０年代になると、地域の方々との絆を深めるため、様々な取り組みを始めた。その端緒となったのは１９７５（昭和50）年に始まった「キリン教室」であった。キリン教室では、近隣の町会の方々を対象に、従業員が講師となって剣道や茶道などを実費のみで教えていた。キリン教室は東京工場が製造を終える１９９８（平成10）年まで続けられ、延べ５，０００人以上の方に参加いただいた。また、地域の方々向けの工場公開も１

969（昭和44）年から行っていた。のちに「キリンフェスティバル」と呼ばれたこの行事は、毎年の地域の恒例行事となっていた。

東京工場は完成時から約30年間、「キリンラガービール」のみを製造してきた。東京工場でラガー以外の製品を初めて製造したのは1989（平成元）年のことである。1990（平成2）年に「キリン一番搾り」が発売されると、その翌年には東京工場でも一番搾りをつくりはじめた。

そのようななか、国内のビール消費量は1994（平成6）年をピークに低下に転じた。時代の流れの中で、当社の生産体制も変革を余儀なくされ、キリンビール東京工場は1998（平成10）年夏に製造を終了することとなった。1998（平成10）年9月1日が東京工場最後の日となったが、その前々日の8月30日には、地域の方々への感謝の気持ちを込めて、最後のキリンフェスティバルが行われ、多くの方々に見守られながら、その歴史に幕を閉じた。

1957年、完成披露時のキリンビール東京工場

1998年、キリンビール東京工場は41年の歴史に幕を閉じた

３　読売新聞東京北工場
（北区堀船四の二の一）

株式会社読売プリントメディア東京北工場担当
栗村　政伸

読売新聞東京北工場は２００３年（平成15）10月、旧キリンビール工場跡地に竣工し、同11月９日から操業を開始しました。

敷地面積２万１５００平方㍍。サッカーグラウンド三面分の広大な敷地に地上四階、地下一階の工場建屋を有しております。

１分間に新聞１千部以上を印刷できる東京機械製作所製の高速オフセット輪転機６セットを備え、全国29か所（２０１６年現在）の読売新聞印刷工場（委託印刷を含む）の中でも最大規模を誇っています。

70人余りの社員が交代で、東京都内や埼玉、茨城県内に向け、読売新聞朝刊80万部、夕刊25万部を日々印刷・発送しています。

住宅街にある工場なので、地域の皆さまとの関係を大切にしています。工場内にある運動広場とコミュニティーホールは皆さまの懇親の場としてご利用いただくとともに、お祭りや地域防災の取り組みにも工場として積極的に参加させていただいております。

また、日本製紙物流倉庫をはさんで操業している日刊スポーツ印刷社王子工場とは地下トンネルを通して、同倉庫から新聞用紙の供給を受けています。ライバル新聞社が１本のトンネルで〝運命共同体的〟につながる珍しい工場でもあります。

建物は、隅田川から吹き上がる川風の勢いを和らげるため流線型に設計されており、その優美な姿が評価され、第２回北区景観賞に選定されました。

このほか工場１階の展示資料室には、１８７４年（明治７年）11月２日の読売新聞創刊からこれまでの紙面や生産機器が展示され、取材―編集―印刷―配達まで新聞制作の流れをわかりやすく解説しています。中でも、読売新聞写真部のカメラマンが実際に使用した報道カメラの展示コーナーは、「歴史を間近に感じることができる」と来館者

に人気です。

「洋紙のふるさと・王子」の新聞印刷工場として、これからも地元の人たちに愛され、発展していけるよう社員一同精進する所存であります。

第２回北区景観賞にも選定された読売新聞東京北工場

4　宝酒造㈱王子工場について

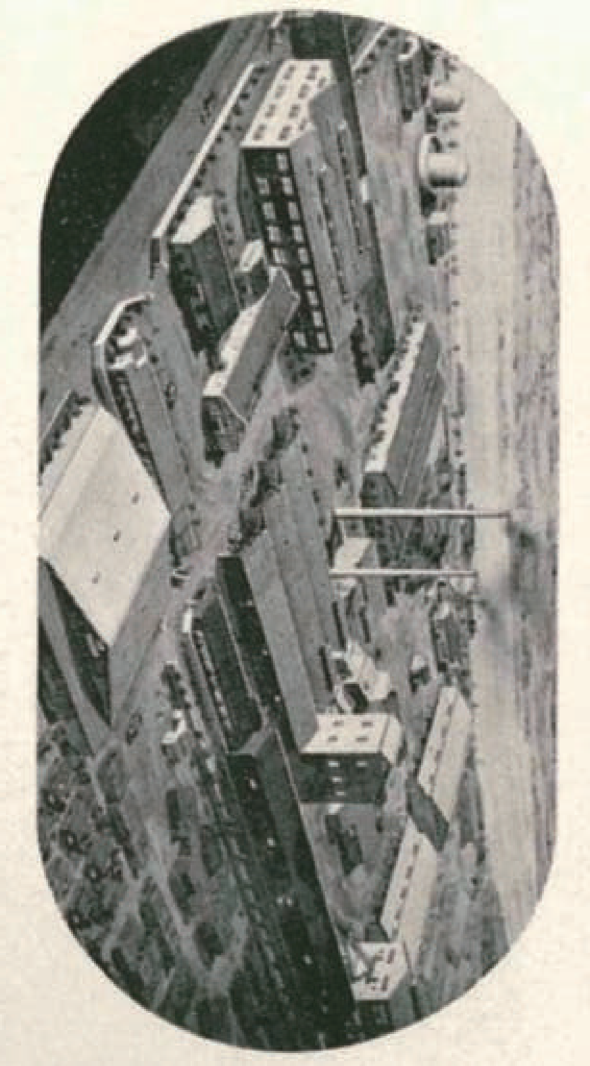
宝酒造㈱環境広報部
部長　松本　博久

　現在の都営堀船アパート付近にあった宝酒造㈱王子工場は、もともと大正製酒㈱の工場として１９２０（大正９）年から当地にあったようです。その後１９２９（昭和四）年六月に当社が買収・合併したことにより当社工場となりました。大正製酒の工場として操業以来、当社工場が１９６９年（昭和44）年11月廃止、１９７４（昭和49）年４月に閉鎖するまで五四年もの間当地にあったことになります。この工場は、敷地面積１２，７８０坪、建物面積４９４２坪を有し、主要消費地である東京にあった唯一の工場でした。合併当時は焼酎、葡萄酒、ウイスキー、合成清酒などを生産していましたが、その後は焼酎を中心に生産し、一時戦時下には軍需用アルコールの生産も担っていました。従業員数は、古いものでは１９３２（昭和７）年に73名、１９５５（昭和30）年には３３５名（最盛期かどうかは不明）が働いていたとの記録が残っています。

　この王子工場の歴史には、三つの大きな転機がありました。まず１９２３（大正12）年の関東大震災（発生当時は大正製酒の工場）、次いで１９４５（昭和20）年の東京大空襲で、二度にわたり工場は被災し壊滅的な状況に見舞われました。しかし、早期に復興・再開を果たしたことを機に、「宝焼酎」は当時の人々の疲れや悲しみを癒し、庶民のお酒として広まることとなりました。そして最後は１９６９年の工場閉鎖です。これは全国各地に分散していた工場を統合するという経営合理化の一環として行われたものでした。王子工場は工場排水や消防法上の問題から製造面では厳しい制約をうけ、設備の老朽化とともに早急に改善を要する工場でした。そこで１９６９年千葉県の松戸工場に移設し集約され王子工場は幕を閉じます。その後１９７４年までは製品を保管する蔵置場として残っていました。

　今回、王子工場の歴史を紐解くなかで、その昔工場周辺が自然豊かな田園地帯だったことや、「梶

原の渡し」を使って通勤した話、そして日夜営々として煙突の煙を棚引かせていた当時の風景描写など、戦前から終戦、そして高度成長期までの激動の時代に、王子が工場地帯として発展していく様子が社内報から窺い知ることができ、感慨深いものになったことを付け加えておきます。



宝酒造㈱王子工場全影

5　堀船とともに～80年の歩み

株式会社リーブルテック
顧問　幸田　雅廣

東京書籍株式会社は１９０９（明治42）年、国定教科書の翻刻発行会社として発足し、１９３５（昭和10）年に東京市王子区堀船町に移転してまいりました。

工場はドイツの航空機製作企業ユンケル社のユンケル式建物にヒントを得たダイヤモンドトラス式で、当時の日本では柱なしの丸型十二間幅（21・8メートル）の建物は珍しいものでした。独特のかまぼこ型工場は当時「トンネル工場を作るそうな」と冷やかす人もいたそうです。印刷・製本工場のほか事務所は斬新なアール・デコ調でデザインされており、様々な建築誌で紹介されました。

事務棟・守衛所とともに東京都北区文化財保護条例に基づき、北区指定有形文化財（建築物）第一号に指定されていました（１９９９～２０１３年）。

１９６８（昭和43）年、検定教科書の印刷・製本・発送の一貫作業を続けてきた工場部門は出版部門と分離し、この地に新しく東京書籍印刷株式会社が設立されました。

１９９０(平成２)年には王子工場が手狭となったため、埼玉県加須市の加須・大利根工業団地に埼玉工場を建設しました。

２００３（平成15）年、埼玉工場は日本印刷産業連合会　印刷産業環境優良工場となり、同年、経済産業省商務情報政策局長賞を受賞しました。

２００９（平成21）年、業務拡大と一層の飛躍を期し、社名を株式会社リーブルテックと改め、２０１１（平成23）年には印刷・製本の工場機能をすべて埼玉工場に集約しました。

２０１４（平成26）年、本社王子工場は老朽化に伴い解体工事に着工し、２０１６（平成28）年に新事務所棟が完成しました。

堀船とともに80年、これからも地域とともに歩む企業として活動してまいります。

工場のダイヤモンドトラス構造

三、郷土梶原の名菓

田久保　海誉

梶原堀之内村と船方村は、江戸時代から明治時代は純粋な農村地帯であり、明治維新後はいくつかの大工場はあるものの、中小の工場が多い工業の町でありました。このためか、町を代表する名物や食べ物と言えるものはなかったと思います。しかし、最近になってこの地区を代表する素晴らしいお土産としては、「都電もなか」を挙げることができると思います。梶原・堀船を代表する銘菓として都電もなかについて、菓匠明美二代目の久保裕子氏に記事を書いて頂きました。

1　都電もなか

都電もなか本舗
明美製菓 菓匠明美
二代目　久保　裕子

時間の経過などを記述する前に、先代伊藤裕規に代わりまして、今日ある和菓子店「菓匠明美」を育てて頂きました地域の皆様に心から感謝を申し上げます。

さて、「菓匠明美」は先代が昭和三十二年に、梶原銀座商店街に「御菓子司明美」として開業しました。七坪のお店に、菓子用ショーケース一つ、甘味喫茶用のテーブル数卓、さらには狭い厨房で菓子作りをしていました。当時、先代は二十五歳、母が二十三歳の若い夫婦で、二人だけでの出発でした。長い修行の後、職人から独立し、文字通りの裸一貫での出発でした。しかし、資金はすべて借金でした。病弱ではありましたが、祖母も資金作りに奔走してくれたそうです。また、開店に不可欠な菓子作りの道具一式を、「出世払いでいいよ」

の一言で用意して下さったのは、合羽橋道具街のご主人方でした。この心意気には感謝の言葉もありません。苦しい時に支えて下さった方々に恩返しをするために、先代夫婦は粉骨砕身で仕事に励み、地域で一番美味しい和菓子のお店にすることを決意したと聞いています。

来年（平成二十九年）で創業六十年となります。店の屋号「明美」は先代が両親の名前から一文字ずつを取り、名付けました。両親への感謝の思いが込められている屋号です。

先代は開店以来、地元のお土産品を作り、商店街や堀船の町を有名にすると同時に、地元に恩返しをしたいと長く考えてきました。梶原ならではのお土産品はなにかと試行錯誤を繰り返えしていました。昭和四十年代に東京都により都電の全面撤廃が発表されたおり、目の前を走っている都電の姿を形に残せたらとの思いから形にしたものが「都電もなか」です。昭和五十二年に商品化し発売しました。発売直後から、「都電もなか」は見た目の楽しさと上品で奥行きのある甘さからご好評を頂き、その後も、地元の皆様を始め、多くのお客様にお求め頂いております。先代は平成二十三年に七十九歳で他界しました。しかし、すでに述べました先代の志は、私や父の弟子達にも受け継がれています。先代の座右の銘は「お客様が満足された時が商いである」でした。当店はこれからも、一つ一つに真心を込めた和菓子作りを通じて、地元の皆様やより多くのお客様に満足を頂けるようにと考えております。

堀船郷土史平成増補版

平成二十八年十月十五日　発行

定価　五百円（印刷実費）

著　者　田久保周誉

編　者　堀船郷土史を語る会編（代表堀江毅）

発行者　堀船郷土史を語る会編（代表堀江毅）

発行所　宗教法人福性寺
〒114－0004
東京都北区堀船三丁目十番地十六号
電話　〇三（三九一一）七七〇一
ファックス〇三（三九一一）七七〇二

印刷、製本　コロニー印刷
〒189―0001
東京都東村山市秋津町2―22―9
電話　〇四二（三九四）一一一一

堀船郷土史平成増補版

田久保周誉 著　堀船郷土史を語る会 編
発行所　宗教法人福性寺
http://fukushoji-horifune.net